頭腦の乃公に教へてくれ」

あまりの意外と、あまりの皮肉に、聊か躊躇せしが、今日こそ決心の省三、ます〳〵膝を進めて、

「お父さん其お答へする前、ちよいと伺ひます、家庭に下女は居なくても主婦たるもの〻覺悟次第で、飯も炊いたり拭き掃除も出來ますが、工場に職工の居らない時、その社長たり資本家たる者が數百人或は數千人といふ職工の働きを一人や二人で出來ませうか、職工と下女は全然、まるで性質も組織も違ッたもんですよ、は〻〻〻そんな御冗談は別として、お父さん、申し上げる通り實際、資本と勞働の衝突問題は現在に迫ッてゐて、ます〳〵險惡の狀態を含んで居りますから、勞働組合の公認がないの治安警察法があるのと、そんな手ぬるい薄弱な法文を盾として安心はして居れません、彼等の身體は絶えず工場の機械に密著して居ても彼等の頭腦は既に機械的を離れて、もはや一個の人格を精神的に自覺して居りますから、これを認めて相應の待遇を與へざる限り到底、彼等の叫びは止みますまい、つまり現行の工場法案に滿足しない彼等は、誘感煽動の四字を以て睨ふる〻警察に恐れずして、お父さん、御覽なさい、きッと近き將來に時代の推移に伴ひ案外の鞏固なる團結力となッて怒濤激浪の押寄せるが如くに現はれますぜ　その時に第一、襲はれるのは今日の資本家で、もし會社工場を海岸の建築物とすれば、いくら丈夫に建て〻あッても、この大海嘯には迚も叶ひません」

「省三、お前も隨分、近頃は談話が上手で、なか〳〵巧く人を說くやうになッたよ、最初は家も富も入らないといふ恐喝文句で來て、最終には勞働者の押寄せる大海嘯だ、は〻は〻」

「お父さん、省三は眞面目で御坐いますよ、かりにも親に對して、說くの恐嚇すのと」

「馬鹿、それが眞面目で聞けるか、いづれの國、いづれの時代、いかなる事にも實際と理想は遠く離れて、容易に一致するもンでない、指頭の自由になる團子細工と違ッてるから、さう臆病に慌てゝ狼狽へるな、まだ早い、貴樣のいふところはね、工場の職工が其會社の株券を一枚なり二枚なり持つやうになッてからだ、そこで始めて資本家と勞働者の穩健なる調和は取れるが、たゞ徒らに他人の富を呪ふ裸蟲の空騷ぎで何が出來るもンか」

「お父さん、さう仰しやれば、もう何も申し上げません、いくら申し上げても到底、お聞入れないとすれば、萬事を成行に任して、これで打切りますが、前夜あの岡田貞吉を病院へ運んだ事、あれだけは一切、御關係のないものとして下さい、毎月、いただく省三の小遣で辨じますから」

「お前の小遣で辨じろとは、いはない、また入れた以上、引ずり出せとも、いはない、それくらゐの金は何處から拂ッても宜いが、八人の奴は斷然、明日かぎり首を切るぞ、今まで捨てゝ置いたのは寧ろ恩惠的で、彼等の反省を促す心算だッたが、迚も無效な奴等だ」

「この際、彼等八人の首を切ッて、ごういふ動機になるか、それも自然の成行と致しますが、お父さん、この省三が願ひます、どうか彼等八人に尠くも半年分の給料を、お遣り下さいませンか」

「いけない、自己が勝手の喧嘩で怪我をした岡田貞吉を病院へ入れただけで澤山だ、もし彼等に半年分の給料を與へたとすれば、途中で後悔して工場へ出たもの、第一また最初

から彼等の煽動に乘らなかッたものを、どうする、忠實なる精勤賞與は全然、無意味になるぞ」

「よろしう御坐います、では、それも叶はないと致しませう」

「當然だ、こころで貴樣、それに對して、何とかする氣カ」

「いや別段、何とも致しません、致しやうが御坐いません」

「省三、よく考へて見るが宜いぞ、この財産全部を誰に讓る、お前は乃公の子だ、親として自分の子を無理往生に押へる筈があるか、つまり皆お前のためだよ」

父の傳兵衛は子のためと思へど、その子の省三は父のためを思うて、互の思想上に新舊の衝突、これで濟むべき筈なし、

兄の貞吉が思はぬ不意の非常線にかゝりて二十四時間を警察に拘束され、それが間違ひの基となりて七人のため頭を割られ袋叩きに逢ひし事も、驚いて駈け付けし川口省三のため強ひて病院へ運ばれし事も、夢だに知らぬ妹お雪は父の手前、絶えず兄の影身となりて、わざと笑顏を作りながら、

「お父さン、さう心配しなくッても宜いぢやありませンか、病人の親を抱へて、わたしのやうなものもあるし、兄さンだッて考へて居ますよ、實は過日の晩、歸ッて來た時も、さうですが、いろ〳〵お父さンに打明けて、悉しい談話をする心算だッたさうですが、つい、あゝいふ工合で、それも出來ず、お父さンも亦、怒ッて仕舞ッて、わたし、堪らないから路地口まで追ッかけて行くと、振り返ッてね、やはり自分が惡かッたと、ほろ〳〵泣いて居ましたよ」

父の久藏、くゝり枕を立てゝ病める體を片肱に支へながら、

「乃公だッて、親子だもの、わざ〳〵蒲團の下へ隱すにも及ばないが、もう金は懲々だと仰しやッた事を考へると最初の百圓を彼奴の手で御返戻した時、さンざ皮肉な文句を並べたに相違ないから、その後また折角あゝして下すッた御深切に對し、あの呉服切手なンか、うか〳〵彼奴に見せられないからだよ、それを彼奴、猶更ら變な目で睨みながら、この病人の親へ突ッ掛ッて來るンだ、さういふもンで、乃公の子に、お前の兄にあンな氣の荒い强情な奴が出來たかねェ」

お雪は我身を責めらるゝよりも苦しく、薄闇き廢家の電燈に猶更ら際立ちて眞白き片手を振りながら父の言葉を打消し、

「あら、お父さン、さうぢやないンですよ、いくら强情な兄さンだッて、勿體ない、病人の親へ突ッ掛るなンて、そンな筈がありますか、あれはね、つまり、お父さンや、わたしの身を思ひ過ぎて、自分の立場もあるし、いろ〳〵一時に込み合ッたところへ、あの氣性ですから、あゝなるンですよ、いつでも直ぐ後悔して、泣いて居ますもの、お父さン、兄さンは案外、わたしよりも却ッて、涙脆い、泣蟲なンですよ」

兄を案外の泣蟲といひながら、我身は猶更の泣蟲、いき〳〵と張切る目元を溢るゝ涙に曇らせて、頻りに父を慰撫むれば、父もまた瘦せたる手の甲に老の兩眼を拭ひ、

「兄の事を言ひ出すと、お前が可哀さうだからね、なるべく胸裡に押へて居るが、どう考へても彼奴、あのまゝにして置いては、ます〳〵會社へも世間へも濟まない事が出來るに極ッてる、それも今までと違ッて、その會社を持ッて在らッしやる方の御子息が、わざ〳〵かういふ見苦しいところへ度々、おいでになッて、職工の親や、妹へ御丁寧な言

葉で、いろ〳〵ご御深切にして下さるンだもの、他人は、どうか知らないが乃公の氣で、うッちやッて置けるかい、まだ宵だ、お雪、端書を買ッて來て、是非とも明日中に歸ッて來るやう、至急といふ字を入れて、出してくれ」

「お父さン、さうしなくッても、兄さン歸ッて來ますよ、過日の晩あゝいふ工合で出て往ッたまゝですから、自分も氣にかゝッて居ますさ、わたし、きッと明日か明後日ごろ、來るだらうと思ひますワ」

「いや、此方の思ッた通りになる奴ぢやァない、だらうぐらゐで待ッて居れない、やはり今夜、出して置いてくれ」

「兄さンも兄さンだが、お父さンも。をり〳〵一途ですね」

「かうなるのも皆お前や彼奴のためを思ッてるからだ、しかし嫌なら嫌でも宜いよ」

「いゝへ出します、出します、すぐ買ひに往ッて、出しますよ、お父さン出しますよ」

おろ〳〵として銅貨入の巾著を胸帶の間に挿込み、そッと片袖に目を拭きながら慌てゝ座を立ちしが、立際の爪頭を破れ疊、引ッかけられ、おもはず屈みて眉を八の字に寄せし痛み、運命の神まだ此お雪を憐れまずして無殘に横を向けり、

破れ疊の足に爪頭を痛めながら、そのまゝの小走りに路地口を出でしお雪、宵闇の片側を傳うて四五軒あまり行きし時、中折帽子を眉深に薄き單衣のインバネスを纏ひし男の立姿何氣なく避けて通り過ぎし背後より、

「ちよいと」

聲をかけられて、振り返るべき筈を却ッて二歩三歩、おもはず進めしに、はや近づいて、

「どこへ行きますね」

呼び止められし最初の聲に氣も付かざりしが、二度目の聲は今宵にかぎりて和服の川口省三、

この邊を今ごろ外に用のない人と思ふや否、はッと俄に何こやら恥かしき心地、されど即座の方便に浮世馴れたる言葉も出でず、低く小さく口籠りながら、ありのまゝに答へて、

「つい、そこの郵便局まで、まゐります」

省三も何となく心に咎めしか、四邊を見廻しながら、

「さうですか、郵便を出しに」

「はい、父が申し付けましたので、兄を、急に呼ばうと存じまして」

兄は病院にありとも知らず、その父、この妹、あの兄に急用ありと聞いて、いふにいはれぬ一種の苦痛を與へられし省三、わざと平氣に言葉を靜めて、

「はゝア、どういふ用ですね、お父さンでも急に、惡くなッたのですか」

「いゝへ、父の病氣は別段、變ッた事も御坐いませんが、頻りに兄の事を、心配いたしまして、あのまゝでは濟まない、相濟まないと、只そればかり喧ましく、申しますので」

省三の身に取りては猶更ら苦しく、

「なるほど、あゝいふ眞面目な、正直な、お父さンの氣では、さうでせう、さうですがね、實は此方にも、いろ〳〵その邊の事を考へて今夜、わざ〳〵來た事は來たのですが、あまり度々お邪魔しても、よくないと思ッて、一旦、路地を這入りながら、また出て、はゝゝ此まゝ歸らうかとして居るところへ幸ひ」

さらに一歩、倚り添ふが如く、聲を潜めて、

「郵便は何處」

「あの、辻の角を曲ッて、五軒目で御坐います」

「往復で、わづか二町ばかりだから長い談話も出來ないが、病人の枕頭で、よけいな氣を揉ませるのも氣の毒だし、困ッたな、十分か二十分、ぶら〳〵その邊を歩きながら、話して置きたい事があるンだが、無論、兄さンの事でね」

現在その兄を急に呼ばむとする折柄、善惡とも兄の身に取りて大切の人、また悲しき父の病氣を來る度に絶えず慰められ優しく尋ねられる人、世間を羨まねど貪しき我身に驚くほどの嬉しき物を數々に哀れまるゝ人、まだ戀の色にも穂にも現はれねど、いつしか自然に引付けらるゝお雪、

「兄の、お話しで御坐いますれば、この郵便も後に致しまして」

「さう、さうだ、さうだ後で宜い、また出すに及ばなくなるかも知れない」

省三さらに暫く考へて後、

「どうだらう、やはり、お父さンに、斷ッて置いた方が宜いかね、あまり近いところだから、ちよいと遲くなッても、氣にかゝりは、しまいかね」

「五分か十分ぐらゐなら、歸りまして、途中お目にかゝッた事を、いひますから」

「だがね、度々、來られないンだから幸ひ今夜、ゆッくり、兄さンの事に付いて、話したいと思ッて居ますよ、毎日あの電話局で誰か交誼の好い、お友達、あるでせう、其お友達に逢ッたとでも、言ッてね、これは親に嘘を吐くンでない、あゝいふ昔氣質の年を取ッた病人に入らざる心配をさせないためだ」

若き男女の隙間を覘ふ盜人よりも恐ろしく大膽なれど、忍び込む業に不思議の妙を得て、なかなか容易に姿を現はさず、そッと深く心の底に影を潛

めながら、油斷を見濟して次第に頭を持ち上げ、もはや我物となれば自由自在に手鞠の如く翻弄し、うか〳〵すれば生命まで奪はる、

端書一枚の買置さへなく、父に促されて兄を呼ぶため小走りに横町の郵便局へ急ぎし途中、これで四度目の川口省三に出逢ひしお雪は、宵闇の此方より戀の曲者に狙はれし初期、兄の事に引かれて兄を呼ぶべき端書も買はず、まだ遲からぬ宵の五分十分と思ひ、ぶらぶら其邊を歩みながらの談話に、交誼の好い友達あるかと問はれし時に、戀の曲者、いつしか近づき來りて隙さへあれば其まゝ直ぐに心の底へ忍び込まむとする危さ、

されど現在の川口省三に對するお雪は、兄思ひの一途に只この人を兄のため大切とのみ、親思ひの一途に只この人を親のため有難しとのみ、また我身のためにも貧しき境涯を情深く憐れまるゝ人とのみ思へば、それを幸ひの隙間として、戀の曲者に覘ひ寄らるゝとも知らず、

「一人や二人、お友達も御坐いますが、局で毎日、休息の時間にお談話する外、今まで何處へも、誘はれました事は」

省三は幾度も首肯きながら、

「なるほど、さうだらう、さうでせうな、お察しする、お父さンが長らくの病人で、兄さンが、あゝだから始終、絶えず心配ばかりしてね、なるほど世間の娘さンと一緒にはなれまい、氣の毒なこッた、しかし今夜は、ゆッくり、悉しく話したい理由があッて、わざ〳〵來たンですから、無論、兄さンの事でゞすよ、ちよいと、さういふ工合に、少々遲くなッても安心のため、お父さンへ斷ッて置いた方が宜からうと考へるが、どうですな」

暫し歩みを停めしお雪、闇にも白き思案の小首を傾けながら、さうするとも得いはず、

「どういたしませうね」

はや半まて傾きし言葉に、その機を外さず矢繼早の省三、

「それが宜い、それに限る、今もいふ通り、決して親を欺したり嘘を吐くンでない、寧ろ親への孝行で、病人の親に氣を揉ませないためだ、ちよいと手輕く、お友達に逢ッて一時間ばかり其邊を散歩したいと、斷ッて來なさい」

「で御坐いますが、その間、こンなところで、お待たせ致しましては」

「なアに構はない、少しも構はない、あの辻を右へ曲ッて、五六間のところを、ぶら〳〵歩いてるからね、あまり急いで轉ぶといけないよ」

身分を思へば雲泥の違ひ、貧富の境遇、あまりの相違に却ッて何の疑ひもなく、只その人の口より優しき此一言は心に沁々と嬉しく、すぐまた來る筈の身に小腰を屈めて會釋しながら、ちよこ〳〵と走り行く後姿、宵闇の星明りに透せば、省三のため名花一輪の覆に包まれて行くが如し、

あの呉服切手、その後あれで何を買ひ求めしか、今の姿は元のまゝの古き染絣、もしや著替へて來るかと、待つ身の省三、辻を曲りて横町の五六間を、ぶらり、ぶらり、其お雪の出直して來れるを待ち受け、手も觸れず袖も觸らねど、名玉を擁する　如き心地の省三、そろ〳〵歩みながら、

「よく斷ッて來たでせうね、お友達に誘はれて、一時間ばかりと、お父さン、何といひました」

立並びて歩きも得せず、わざと聊か後れ足に、

「それなら、ゆる〳〵往ッて來いと、申しまして」

「年を取ッた病人だから、さういふ工合に萬事、お父さンへ安心さして置いて、その上で、出來るやうに、いろ〳〵と考へた方が宜しい、親子の間で打明けるも結構だが、あまり露骨に明放して無駄な心配さすのも、よくない、ところで歩いても居れないが、ごッかね」

待合にも料理屋にも連れて行かれず、手輕にビヤホールかコーヒ店もあれど、それさへ人目に立ちて何とやら心に疚しく、

「やはり歩きながら話しませうね、しかし草臥れるだらう」

「いゝへ、貴君さへ、よろしければ」

「ぢやァ此邊で、あまり往來のないところは何處」

「あのウ、明石町の河岸端が一番、近くで、すぐで御坐います」

「かうなると人間も世間も案外、不自由なもンだ、はゝゝゝでは、その邊を、歩きながら」

一方は佃島に向うて大川の吐口、一方は商店もない洋館つゞきの片側、加之も月なく夏には早く、ひッそりとせし闇路に往來ふ人もなく、たゞ星影に林立せる檣の下より船の灯、ちら〳〵と浪に碎くるのみ、

「なるほど、淋しいところだ、こンな淋しいところで、かういふ談話は猶更ら氣の毒ですがね、實は兄さン、病氣だよ」

お雪、おもはず我を忘れて、

「病氣、あら病氣、どンな、どンな病氣で御坐います、つい過日の晩、家へ歸ッて、まる

りましたに」

「その明る晩だ、その明る晩、驚いては、いけないよ、ふとした事の間違ひから、怪我をしてね」

「おや、まア怪我を致しまして」

「さう、大して心配するに及ばないが、おもはぬ災難で、不意の怪我をしてね、兎も角も早速、病院へ入れる事は入れたが、今日、醫者に聞いて見ると、ちよいと急には、出られないやうだ、つまり仲間の奴に、こンだ考へ違ひをしたものがあッて、それがため、疵を受けたといふこッた、なアに本人あの氣性だから大丈夫、思ッたより早く癒るに相違ないが、そこで川口省三としては、此まゝ默ッて居れない、苦しい理由があッてね、第一お父さン、あれで、今度また兄さン、あゝなッたとすればこの省三、いよ〳〵堪らなくッて、實は内々、謝罪かたゞ〳〵、相談かたゞ〳〵來たンですよ、何故、かう豫期に反した、いろンな事が不思議に絡ンで來るかなア、どう考へても、さういふ筈のない事が悉く裏切られて　善いと思ッてすればするほど、猶更ら惡くなるばかりだ、もう世の中が嫌になッて仕舞ッた、金も家も名譽も入らない、あの船の中で貧しく樂しく暮してゐるものは、どンなに人生の幸福だらう」

三、おもはず背を撫でゝ耳に口を寄せ、闇の中に立ちながら、兩袖を顏に押當てゝ啜り泣きのお雪、わッと一時に聲を洩せば、省

「親子三人、いかなる事があッても、引受けますよ、たしかに引受けた、安心しなさい、今いうたのは自分の愚痴だ、うッかり出たので、なアに人の力で及ぶ事は」

川口省三のため赤十字といふ一言の意味に押へられ、強ひて目黒の病院へ運ばれし岡田貞吉、

省三としては、この際この岡田を親友の如くに取扱ひ、あらむかぎりの優遇を與へむとせしが、流石に何こやら心の底に疼しく、父の傳兵衛に憚かるこころもありて、世間の手前、わざ〳〵らしき一等室を避け、二等室の第七號へ、

貞吉その時までは戰場に疵を負ひし勇士の如く、額の裂傷も全身の打撲も四十度の熱にも屈せず、張切る元氣に殆ど我を忘れて談笑せしが、疵を洗はれ繃帶を仕替へられ、病室のベットに載せられて氷枕に横へられ、當直の醫師に小首を傾けられし後、片隅に看護婦も睡りて四邊に人なく、夜は次第に更け渡りて猶更の寂莫、ひッそりとせし孤獨の耳朶へ、いづこともなく患者の唸る聲を聞けば、我身も鐵石にあらず、脆きは人間、この肉體いかに異常を來すかと思ひし一刹那、動く度に總身の骨節は俄の疼痛を覺えて、針を刺さるゝが如くに堪へ難し、

老いたる父は長く病み、あはれなる妹は絶えず泣き、おもはざる我は味方のため全身を痛められ、いはゞ敵のために醫藥を與へられて、あくまで氣も心も確固なれど、今こゝに動けぬ五體を病院のベットに横へしかと思へば、身體の苦痛よりも心の苦しさ、

もはや夜は明けしか、カーテンを通して窓際の白みかゝりしを、寢ながら横に見る感慨無量、貞吉の目には、聲なけれど男泣きの涙、はら〳〵と冷し、

いかなれば親子三人、かくまで不運の底に陷りしぞ、まだ目的の一端も擧げざるに、主義のための犧牲としては、あまりの高價に過ぎたり、餘儀なき自然の禍としても、あまりの無殘に過ぎたり、もし人力に叶はざれば、たとひ此まゝ我こゝに無念の憤死するとも、せ

めて父を助け給へ妹に幸福あれかしと、始めて泣きながら神を祈りし岡田貞吉、夜は明放れて、看護婦の起き出づるを待ち、

「こゝへ來た時は、さうもありませんが、前夜、更けてから急に動けなくなッて、動くと身體中が痛みます、どういふもンでせうな」

おもひの外に冷靜の顏を振向けし看護婦、まづ自己の寢具を疊みながら、

「今日、院長さンお出になッた上で、よく分りますが前夜のこころでは、全身の皮膚が妙になッて筋肉に大變な異狀を來してるさうですから、じッとして居れば何ですが動けば必ず痛みますよ、疵よりも第一それが案外に長引くでせうから當分まア其まゝ御靜養なさるンですね」

案外に長引くと聞くや否、その後は問はず、貞吉の兩眼、細く閉ぢて絲の如し、

生れて以來、二十三歳の今日に至るまで、いまだ醫藥といふものに何等の用なく、貧苦の中に育てど元來の健康體、只これを人生の幸福として、友達に對する平生の冗談にも、もし乃公の枕頭に藥瓶の置かれた時は香奠を呉れと戯れしほどの我、思ひきや人のために身を痛められて病院のベットに横はらむとは、

夢の如しといふ言葉は、殆ど世間の習慣語となりて、平氣に何の意味もなく用ひ來りしが、正しく現在の我身に始めて深酷の感を與へられ、この數日間に於ける不思議の運命を顧みれば、間斷なき表裏轉々の曲折波瀾、一として我より豫期せし事なく、假にも我想像に浮べし事なく、いかにも夢を見たるが如く、今なほ夢の如し、

動けぬ身の痛みよりも心の底に幾層倍の苦しき一夜を明して、悶々の情に堪へざる翌日、川口省三の名刺と共に贈られしは、時候にあらむかぎりの果物を山の如く盛りし大籠、

これを見るさへ、浮世の義理の柵に責めらるゝ心地、次第に我主義の幾分づゝを削り取らるゝが如き心地、

その翌日またカステイラの大箱に添へて、紙に包みし薄きもの、菓子は手に觸れねど、おもはず小首を傾けながら、包み紙を解けば、洋書一册の表紙も剝ぎ取り前後も切取りて、殘りし六ページの横文の別の紙に飜譯せし文章、これを讀みしに、

英國の或電氣職工、多年の貧苦に油斷なく働けども運命の迫害を免れずして、自己の身は粗食にさへ飽きたる事なく、また妻子に一日の慰安だも與へし事なく、親子三人は常に絶えず餓を忍びながら、食はざるべからず生きざるべからずといふ餘儀なき生活のため、涙を呑んで日々の工場に通ひしが、通へる道には公園ありホテルあり富豪の家ありり貴族の邸宅ありて、その公園は常に青々とせる樹木の蔭を若き男女の天國として戀を語りつゝ散歩せるを見るに付け、そのホテルには間斷なき自動車を驅りて意氣揚々たる旅客の出入せるを見るに付け、また富豪の家には多數の友人を集めて華奢を極めし晩餐の席上より嬉々たる笑聲の洩るゝを耳にし、また貴族の邸宅には不夜城の大宴會を催して寶玉に飾り盡せる音樂舞踏を仰ぎつゝ我身を顧みれば、淺ましき職工服を纏うて日々夜夜の苦しき生活に追はれ、わづかに一本の莨を得るにさへ全身の膏汗を絞らざれば、いづこよりも與へられざる悲慘の運命、同じ人間に生れながら、あまりの無殘なる差別と、あまりの冷酷なる貧富の對照に、今まで固く守りし精神上の平和を破られて、怒りの極恨みの極、あらゆる總ての社會を呪へる結果、彼等の夜を晝として傍若無人に奢れる全盛の基は只この電燈の光輝にあり電燈の光輝を奪ふは彼等に酬ゆる復讐の第一手段なり

と、電氣工場の最も大切なる機械室に入り、多年の得たる技術上より密に電流の源泉を斷ち、ぱッと一時に全市を俄の闇黑界たらしめて、おもはず快心の微笑を浮べしが、翌日、何氣なく我家に歸るや否、妻は狂氣の如くに泣いて取縋りつゝ語るを聞けば、前夜最愛の一子が不意の大怪我をせしに驚いて醫師の許へ運びしが、その疵を縫はむとせし一刹那、電燈の消えし闇黑に手術を施し得ずして、あはれ出血のため遂に死せりと、

この一文を讀みし岡田貞吉、堪へ難き我身の疼痛を忘れて思はずベットの上に起き直り、何を感ぜしか、いかに亢奮せしか、兩眼を閉ぢ兩腕を組みながら、一種異樣の唸り聲、生活の迫害を受けし外國の電氣職工が社會の富豪を呪ひし結果、一時に全市の電燈を闇黑ならしめて復讐の念を晴せしが、その電燈の消滅と共に最愛の我一子を失ひしといふ、あはれに悲慘なる運命の飜譯文は鬼氣を帶びて身に迫り來るが如く物凄く身震ひと共に、ぞッと骨まで寒し、

されど我は勞働の神聖を解して何物をも羨まず、卑しき一個の職工にも偉大なる責任の重きを知れば、この一篇の飜譯文に恐れて初志を打消さるゝものにあらず、この一篇の飜譯文に恥ぢて主義を捨つるものにあらず、此一篇の譯文を讀んで横暴なる資本家の前に白旗を掲ぐるものにあらず、たゞ運命の神の無慘なる事實として彼等富豪の徒を懲戒するよりも更に社會の弱者を迫擊し迫害する事の多きに呆れしのみ、あまり貧富の甚だしき片手落に呆れて我身を思へば、妻子ならねど我にも悲慘なる父あり妹あり、同じ電氣の職工に同じ親子三人、

その行ひし手段は、いかにも卑怯なる陰險の業にして、天眞爛漫たる日本男子の心と違へ

ど、惡魔の如き運命の手に突き落されし哀れさは、海を隔てし遠き國の他人とは思はれず。病室のベットに猶更深き同情の涙を拭ひながら、痛みに堪へぬ滿面を皺めて寢返りせむとすれば、入り來りし看護婦、慌てゝ片手を擧げ、

「あら、動いては貴君、いけませンよ、やう〳〵熱は三十八度に降りましたが、まだ身體中の筋肉は非常に收縮したまゝですから動く事はならないと、固く禁じられてあります。いけませンよ動いては、第一また痛くて堪らないでせう、なるべく動かないやうになさい」

身動きもならざる貞吉、かくなりては看護婦の一言にも反けず、うか〳〵すれば我生命を醫者の手に摑まれ、稍もすれば我運命を川口省三の手に握られ、殆ど一種の監獄に投ぜられたるが如く、そのまゝ餘儀なき目を閉ぢて氷枕に埋もれしが、人知れぬ頭腦の根柢に燃ゆる火は、ますゝ熾々たる勢ひ、

入院せしより三日目の夕方、看護婦の食事に立去りし後、病室の窓に薄墨を刷けるが如き暮色は迫り來りて、頭上に吊せる電燈の光りは猶更ら淋しく、いづこともなく醫藥の匂ひに鼻を穿たれ、かち〳〵と隣室の氷を碎く音のみ耳に入り、俄に廊下を立騷ぐ足音は患者の異變を呈せし爲か、なるほど或意味に於ける地獄極樂、こゝは正しく人間死生の境目を現はせる分岐點なりき、何事にも屈せぬ男ながら思はず不快の感に沈みし折りしも入口の扉を靜に開けて、ひよいと出せし顏は、妹お雪、

これを寢ながら横目に見たる兄の貞吉、動けぬ全身の疼痛を忘れておもはず蛇の如くに鎌首を持上げ、

「お雪かッ」

兄の聲を聞くや否、あやつり人形の絲に引かるゝが如く入り來りて、また其絲の切れしが如く、ぱたりと坐しながら兩手をベットに掛けて顏を押當てしまゝ言葉なく、たゞ啜り泣きの聲、

兄も同じ男泣きの聲を震はして、

「お雪、すまない、すまない事をした、堪忍してくれ」

「兄さン、何を兄さン、さう謝るンですよ」

「いや、お前には、どう考へても、すまない事ばかりだ、決して自分の惡いため、かうなッたンぢやアないがね、かうなれば、言譯も何も皆、あこの祭りで、お前には謝るより外に仕樣のない兄だよ、堪忍してくれ、しかし全體、どうして知ッた、誰に聞いた、阿父、阿父も知ッてるか」

「お父さン、お父さンは、まだ知らないンですから、かくせるだけ、わたし祕して置きますが」

「たゞ賴む、阿父には知らさずに置いてくれ、あゝいふ阿父だから、どこまでも知らしたくない、もし萬一、知れた時は、お前も一處に知らなかつた事にしてくれ、賴むぜ」

「わかりました、わかりましたが兄さン、とンだ目に逢ッたンですねエ」

「ちよいとした間違ひだ、間違ッて出來た事ア仕方がない、世間には人違ひで殺された奴もあるからなア、俗にいふ時の災難と諦めるンだ間違ッた相手に恨みも文句もないよ、これで濟ンだのは、まだ運の好い部だよ」

「ですが、それでも、わたし口惜しくッて、口惜しくッて、堪りませンよ、頭の疵は、どうなンです、痛みますか、さぞ痛かッたでせうね、氣分は兄さン、わたし、かう〳〵だ

と聞いた時は、びッくりして」

「そ、それを全體、誰に聞いたンだよ」

「あのウ、會社の、社長さンの、御子息さンが、わざ〳〵入らしッてね」

まだ知るべき筈なく、こゝへ來る筈のない妹の顏を見るや否、はゝア、さうとは思ひしが、

いよ〳〵それと聞いて猶更の苦しげな顏を皺めながら、

「阿父も、お前も、乃公も、親子同胞、ふしぎに揃ッて運惡く生れて來たよ、同じ義理人情に絡まれて同じ恩になるなら、世の中は廣いンだからね、いくらも外に人はある筈だに、それからそれと段々、こンな事になッて來て、あの人の情を受けるとは、どうせ苦しいにしろ、あンまり、苦し過ぎる、たとひ鬼のやうな高利貸の世話になッて、後で責め拔かるゝとも實は乃公の立場として、あの人の世話になりたくなかッたンだ、しかし今となッちやァ、もう仕方がない、これまで受けた恩は恩で、ありがたく感謝するが、その恩のため往生しきれない、岡田貞吉、あらためて、お前にいふ事がある、お雪、しッかり氣を落着けて、よく聞いてくれよ、これも、やはり、氣の毒に、こンな兄を持ッた、お前の不運だ」

兄の貞吉は動けぬ身をベットの上に起き直りて涙の目に見下し、妹お雪は椅子にもかけず坐せしまゝの身を伸ばして涙の目に見上げ、折しも看護婦の居らざるを幸ひに、兄は猶更ら男泣きの聲を潛めながら、

「いつも阿父の前で、實は、いひたい事があッても十分まだ言ッた事はなし、第一お前に對して、可哀さうだ濟まない氣の毒だといふ心が先に立つからな、どうしても自分の思ッた通り、ありのまゝ話せなかッたが、今日こそ乃公が思ひ切ッて打明ける、加之も此

三四日で人間の果敢ない事や、運命の力に及ばない事を、しみ〴〵と身に刻み込まれたからね、こりやァお雪、かうなッた親子三人の生涯、行末の事だぜ」

「あら兄さン、そンな事を今、さうなッた身體で、わざ〳〵話さなくッても宜いぢやありませンか、よくなッてからゆッくり、今度また聞きますからね、なるべく靜に氣を落着けて、寢てゐて下さいよ」

「いや、かうなッたから猶、話すンだ、話しの順序として、お前に言ッて置きたいのは、近來、いろ〳〵と深切を盡してくれる社長の子息、あの省三といふ人のこッた、始め乃公はやはり、世間普通にある金持の伜で、自動車に乘ッたり威張ッたりするだけの奴と思ッて居たが、其後に湧いて來た、いろンな事で段々、考へて見ると、さうでない、ありやァ父の傳兵衛と違ッて、よほど頭腦も新しいし、氣心の優しい中にも、ぎッか確固



とした手强いところがあッて、よく物事の分る人間らしい、もし乃公と同じ身分で同じ職工とすれば、必ず共鳴一致して奮闘する男に出來てるが、幸か不幸か資本家の子に生れ、おまけに頑固一點張な親を持ッて、社會の大勢に乘ずる我々を向ふへ廻したからね、つまり板挾みの苦痛に逢ッてる樣子だ、實は裸一貫で主義のために戰ふ此方よりも、寧ろ却ッて慘澹の程度が多いかも知れない、しかし現在は我國に於ける資本家と勞働者の大問題で、いやしくも男子その戰線に立つ以上、自分一個の苦しい事ぐらゐ何でもない、どうせ雙方お互ひ拂ふだけの犧牲を拂ふのが當然だ、彼が財產全部を捨てゝ我々の味方に投ぜざるかぎり、あくまで我々は彼を敵として戰はなければならない、この兄が彼のため多少の恩を受けたとしても彼は赤十字といふ立派な人道を意味せる言葉の下に寄せた同情だから、その同情で乃公の鉾を鈍らせない覺悟だ、お雪、この事だけは、よく聞

違はないやう、腹に入れて置いてくれよ、だがね、同じ血を分けた同胞でも男の兄と女の妹は、また別だ、お雪お前は別だよ」

兩眼の溜涙、ほろ〳〵と頰を傳はせし兄の貞吉、おもはず四邊を見廻しながら猶更ら聲を低めて、

「お雪、お前だけは、恩を恩として、素直に有難く、その恩を著た方が宜いぜ、今まで乃公の考へが少々、ひねくれて居たからね、つまらない義理人情に絡まれて引くに引けない、變な事になッてくれるなと言ッたが、女ァ別だ、女ァ別だ、まゝならぬ浮世の成行で持運ばれる女ァ別で、女ァ難かしい理窟ばかりで行かない、それも此、この兄が妹のお前を女としての幸福に包めるだけの事が出來りやァ、お雪、こンな事を言ひたくもないがね、どうせ乃公は前途將來、主義のため生命を抛げ出した身體だ、許してくれ、病人の親を抱へさして、何とも濟まない、兄として一言、申譯のないこッたが、事に依るとこの阿父に不幸の子となり、お前には無慈悲の兄となるかも知れない、つまり乃公を捨てゝ仕舞ッてくれ、詮じ詰めた結局、乃公は主義のために犧牲となり、お前は、お雪、お前はね、不運に生れて來たお前はね、親のため、殘念ながら、貧乏のために犧牲となッて、さゝ幸ひを得てくれ、お雪、お雪」

これまでの父に對し妹に對しては思ふ事の三分を口に出せるのみ、常に七分は腹の底に深く殘せし岡田貞吉、横はりて動けぬ身をベットの上に起き直りつゝ今日に限りて飽くまで言葉を續け、お雪も泣けば我も泣きながら、

「今いふ通り乃公は乃公で、あの阿父の頭腦から見れば、どうしても不幸な奴に出來たのだからね、せめて、お前だけは、おとなしく孝行な、娘になッてくれ、それには幸ひ、

この兄の口より決して幸ひといふ譯ぢやアないが、餘儀なき運命の指圖通りになッてね、いろ〳〵こ優しく深切にしてくれる人の恩を恩として、やはり其まゝ素直に受けた方が宜からうと考へるンだ、たッて嫌なら無理に勸めもしないが、さうすれば自然、阿父の身に取ッても、こンな不幸な伜を的にするよりは、大丈夫だしね、氣休めの買藥で裏長屋の片隅に寢てるよりは、ずッと安心した養生も出來るしね、第一お前も邪、可哀さうに、そゝそンな風俗をして、その妙頃を冷飯辨當で毎日、あンなところへ通はなくッても濟むンだ、お雪、こゝは兄妹ごも大切な運命の分れ際だぜ、一人の親を中間に置いて兄と妹が右こ左への分れ岐だ、お前は親のため、犧牲となり、乃公は社會のため犧牲こなッて此まゝ二度こ再び顏を合さないやうな事になるかも知れないが、其くらゐの覺悟で、しッかり度胸を極めようぢやないか、ごうせ二人とも不運に生れて來たンだよ、何事も泣かずに笑ッて面白おかしく通れる身でないンだからね」

悲しき因果を含めて、ほろ〳〵こ男泣きの涙、お雪は猶更ら堪らず、ベットの端に食ひ付いて、

「兄さン、わたし、どうなッても、かまひませンが、それでは兄さン、あンまり兄さン」

もはや決心せし以上、身も動かねば心も動かぬ兄の貞吉、涙と共に思ひ切ッて、

「お雪、これを、こゝを度胸よく考へろよ、たとひ世間で、お前を何と言ッても、たこひ道德上の議論で、お前を貞操こいふ文字の俎に乘せて、いかに粗末に料理せられても驚くな、いはゆる今日の道德なるものはお刚を料理するほどの力はない、道德の庖丁は赤錆こ錆びて仕舞ッてるよ、加之も自ら好ンで利慾のため虛榮のために進ンだ事でもなしかうなるべき運命の人身御供となッて、それより外に仕方のない境遇の壓迫を受けたン

だ、もし幸ひにして、あの人に階級の差別なく、貧富の差別なくして實行し得るだけの決心と勇氣があれば、堂々たる妻だ、古い頭腦でもないから或は妻として立派に迎へるかも知れないが、そりやア萬一の僥倖で、人生は意の如くならず、總ては豫期に反する覺悟で、妻たらずも宜い、戀あれば戀で滿足しろ、生涯、妻といふ名を、戀こいふ名稱に代へて堪忍しろ、こンな事を、いはれる、お前よりはね、これをいふ兄の心を察してくれよ、腸が千切れるやうだ」

さらに泣聲を潜めながら、

「また乃公としては、自分の妹を主義の違ッた敵の子息に提供するやうな、そンな卑屈な男でないと頑張ッて居たのは、今で考へると寧ろ小さかッたよ、自分の妹は敵に愛せられても主義は主義あくまで、枉げないといふところに最も大なる主義の權威を發揮するンだ、どうしても、お雪、お前と乃公は、泣いて別れるより外、互に立つべき道がない、つまり同胞の緣は薄いンだなア」

父の傳兵衛は例の八人に對して、いよ〳〵斷然たる處置を取るといふ其日の朝、省三は殘れる七人や共同自炊の家に訪うて、いかにも打解けたる友達の如く、また或意味に於ては殆ど共鳴せるが如くに馴れ馴れしく君と僕、

「今いふ通りの始末で、いくら互に頭腦の中が一致して居ても、現在の身の置どころが違ッてる、即ち境遇が違ッてる、つまり各々その社會に於ける立場が違ッて居るから、僕と君等は到底まだ一緒になれない、資本と勞働の問題は世界の大勢としても、今日は猶その理想に向ふ道程で、まだ實際の解決を得たのでなく、いはゆる研究中だからね、研

究の結果、どうせ、いづれにか歸著點はあるだらうが兎も角も最後の勝敗は、別として、遺憾ながら餘儀なく諸君に賴みたいのは、外でもない、今日中に會社を辭して貰ひたい迫られて辭するンでなく、迚も諸君の滿足を得られない會社を見限ッて、潔く去ッて貰ひたい、個人としての川口省三は多少、それに付いて考へてる事もあるが、まづ會社より諸君を解雇せざるに先ンじて、諸君の方から男らしく立派に辭して貰ひたい、癪に觸る諸君の分量と、いふにいはれない僕の苦しい分量と、どッちが多いか、その邊ち察して貰ひたい」

社長たる父の傳兵衞と意見を異にせるは、うす〳〵傘てより聞き及びしのみか、その省三の口より友人の如く、打解けられ、如之も岡田貞吉を病院へ運び込みし前後の事情を眼前に見たる七人、これに向ふべき喧嘩腰なく、一人その代表者となりて、

「お言葉は、よく分りました、かうなッた以上、意見も議論も無效ですから我々は潔く辭しますが、岡田は全體、どうなります、我々としては、一度、岡田に相談した上」

省三、首肯きながら片手を打振りて、

「なるほど、さうあるべき筈だが、しかし彼に相談したところで、やはり同じこッた、會社の方では寧ろ岡田を第一とし八人に對することだから、岡田としても別に議論のない筈だ、また既に、かうなッた以上、無用の議論する男でなからう、後で話せば宜いだらうと考へる、あゝいふ事で、あゝなッて病院に居る間は、なるべく彼の心を騷がせないやうにするのが諸君の好意ぢやなからうが、いかなる事も後で愚痴を零す男でなし、岡田貞吉は暫く僕に預けて置いて貰ひたい、彼を病院へ運び込む時、當分、面會に行くのを控へた方が宜からうと止めたのは、つまり彼の靜養を妨げざるためで、今日こゝに會

社は諸君と縁を切ッても、主義の一致せる以上、あくまで諸君は彼と縁の切れる筈がないから、今、さう急いで殊更に彼の亢奮を來すやうな、わざ〳〵無用の相談するにも及ぶまいと考へる」

省三、さらに言葉を改めて七人に向ひ、

「僕は露骨に告白する、會社は諸君に對して、已むを得ざる自衛上、何等の好意も持たない、今日、諸諸の辭するに對しても、諸君の工場に出て居た日割勘定の外、一文も出さない、これは會社と諸君と根本的に相容れざる當然の結果で、仕方がないとして、別に川口省三、一個人の贈物があります、これは諸君、社長たる川口傳兵衛の子とせず、また會社の人間とせず、いはゞ友人の同情として、おだやかに受けて貰ひたい、無論、岡田の分も一緒に預ッて置いて貰はう、もし萬一、後で誰か喧ましくいへば、この省三、その辯解は慥に引受ける」

無雜作に包みし新聞紙を開いて十圓紙幣の一束を七人の前に差出しながら、

「これはね無論、會社からでなく社長たる父の川口傳兵衛からでもない、この省三が一個人として聊か諸君へ今日までの勞を慰するためだ、實は同じ金を二重に利用する點より考へて、會社と社長の内意を受けたといふ方が宜いかも知れないが、それぢやァ却ッて君等に受けられない意地もあらうし、第一また會社と社長の意志に反して根柢を沒却するから、寧ろ露骨に正直に、ありのまゝを告白する、これは僕が洋行した時に買ッて來たダイヤモンドの指環を賣ッたので、その千三百圓に自分の小遣ひ三百圓を加へて千六百圓八人に分配すれば僅二百圓づゝだが金錢の多少を論ぜず僕の志を受けて貰ひたい、僕は決して君等を敵視して居らない、敵視して居らない今日の境遇上、どッちかとい

へば、資本家側に立ッて居て、現在の父を我意見に説き伏せ得られざるかぎり、つまり父の死せざるかぎり、其子として到底、君等に滿足を與へる事は出來ない、自然に押寄せ來る社會の大勢を防ぎ切れずして資本家の目覺める時は別だが、それまでの間、僕は板挟みの苦しい立場に居らねばならない、どうせ來る運命なら我より進んで天下覺醒の魁となる方が愉快でもあるし、また餘儀なき最後に餘儀なくせらるゝよりも遙に男らしく、却ッて利益は多いが、まだ僕は父の財産も權利も讓渡されて居ないからね、せめての寸志を諸君に呈するンだ、一人分の二百圓は岡田のため當分、彼の病院を出るまで君等の手許へ預かッて置いて貰ひたい」

平均の日給を八十錢とすれば、殆ど九個月分の二百圓、省三さらに言葉を續けて、

「ところで今いふ通り、會社は既に固く決心して居るから、今日、會社より解雇されない前に辭した方が宜からうと考へる、また辭すると共に會社と接近せる此家を去ッて、どッか外で共同自炊なり、下宿なり、さらに居所を變へた方が未練らしくなくて、寧ろ諸君のため男性的の態度かと考へる、主義は主義として遠慮なく、あくまで活動すべしだ、その活動に多少の緩和を得るがため川口省三こゝに諸君へ寸志を運ぶンでない、全然こりやア全然、別問題で、つまり岡田を病院へ入れたのと同じこッた、もし冷酷なる反對の理窟から見れば、失敬だが今日この會社を辭して忽ち明日より生活上の餘裕のない諸君は、此方に取ッての幸ひ、好い氣味だと冷笑すべきところで、いくら立派な主義も議論もバンに放れて何等の權威なく、現に岡田の如き、いはば恐ろしい猛獸の傷を療治してやるのと等しい譯だが、この川口省三は資本家の子として聊かも諸君に不快の念を持ッて居らない、寧ろ諸君の健在を祈る、但し一言、今こゝで諸君と別るゝに際し、僕

の婆心を呈して置きたいのは外でもない、そもく今日の喧しい勞働問題に付いて、その勞働者なるものは全體、いかなる階級、いかなる境遇、いかなる人間といふ事の領分をはッきりと極めて貰ひたいのが先決問題だ、一口に勞働々々といふが、勞働を廣き意味に解釋すれば、殆ど天下を擧げて皆これ勞働者だ、官吏も會社員も美術家も文學者も新聞記者も俳優も其他あらゆる總ての給料と報酬に生活するものは悉く勞働者で、所有の財産より産出さるゝ利益に安樂の生活を營み得ざるものは、いはゆる知識階級また勞働者たるを免れないが、就中、最も神聖にして最も眞面目なる勞働者は直接に身體の努力を提供する諸君だから、願くは此勞働問題を第一まづ諸君の專有物として、怪しげな知識階級と融通的の運動をしては、いけない、動もすれば彼等に利用され惡用され、うッかり油斷すると彼等のため、わけて政治家といふものゝため、お先棒に使はれる恐れあるから、諸君は諸君の範圍内に何物も入れず、その紳潔に正直なる筋肉を唯一の眞理として奮鬪するに限る、をかしく變な智慧を借りたり、理窟を傭ッて來ちゃァ無效だよ、いはゆる知識階級に屬する勞働者と全然、別になッて叫ばなければ無效だ、折角の純なるものが次第に濁ッて來る、のみならず諸君の不利益で、諺にいふ犬骨を折ッて鷹の餌食に取られるかも知れない、知識階級の勞働的には今日まで多少の名譽といふ社會上の慰藉もあッたが、その反對に諸君は寧ろ今日まで社會上の侮蔑を蒙ッて來たンだ、資本家に對すると共に諸君また彼等に對する警戒を怠ッては、いけない」

情理を盡して七人を說き〻川口省三、今日は自動車に乘らず、そのまゝの足を病院に向けむとせしか、昨日の夕方、お雪に兄を訪はせて嘸や同胞の涙まだ乾かぬ中へ、あまりに恩

義がましう思はるゝも辛く、あまりに態とらしう取らるゝも苦しく、さりとて會社へ行けば彼等の辭する前まづ我モに解雇せざるべからず、家に歸れは父の前に首斬の報告せざるべからず、けふの日の暮るゝまで面白からぬ我身を何處に持運ばむかと、無心のステッキを片手に振廻し自然の伏目勝に靴の爪頭を見ながら、ぶら〳〵と大崎より歩み出して、いつしか目黒の電車停留所、

この電車の終點へ何のため來りしかと思へば、これより築地の小田原町へ戀路の起點、流石に恥かしき心地して、また其まゝ的もなく引返さむとせし時、混合ひし滿員の車臺を溢れ出づる乘客、ぞろ〳〵と降りし群集の内に、ちらと見えしは、まッ黒の中に浮出せしが如く、お雪の顔、あはれ何と思へるか、脇目も觸らず差俯いて、人に押され人に揉まれながら、病院の外この邊、用なき筈、小走りに急ぎ行く後姿、

すぐに呼止めむとせしが、何となく呼び損ねて、半町あまり後姿を守り行けば、そのまゝの急ぎ足に辻を曲りしお雪、省三また大跨に横町へ入りし時、二三臺も續きし荷馬車のため、前途を遮られ、暫し路傍に佇みながら此方を見返りて、はッと思へる風情、赤らむ顏に小腰を屈めつゝ行きも得せず、戻りも得せず、恐ろしきものに覘はれたる形容なれど、我心の何物にか囚へられて身動きを失ひ、そのまゝ其處に居縮められたるが如し、荷車の過行くを待ちし省三、わざと何氣なく近づいて、

「きのふ、兄さンを見舞ッたでせうね」

「はい、まゐりまして」

「今日も、これから病院ですね」

「ちよいと、きのふ、申し殘した事が、御坐いまして」

「お父さン、まだ知らない、それも、あのまゝ呼ンでも歸らないから、もし變に思ッて居ませンかね」

「兄も、なるべく知れないやう祕せるだけ祕してくれミ、申しますし、わたくしも、その心算で、いろ〳〵心配いたしまして」

「氣の毒だ、さぞ中間に挾まッて苦しいでせうが、まァ堪忍しなさい、今に、何とかなる、さう惡い事ばかり續かないからね、しかし局の方は今日、お休日」

「いゝへ、お休日では御坐いませンが、父へ、内證で、そッと今日休みまして」

「お父さンへ、心にもない嘘を吐いたり内證で休ンだり、さうして獨り氣を揉むンだから猶更ら苦しい筈だ、ぢやァ午後の四時か五時まで歸れまい、その間、まさか病院にも居れないだらうし、第一また長居しては却ッて兄さンのため、よくない、用か濟めば、どッかで一日、ゆッくりと氣をぬいて、頭腦も身體も靜めた方が宜いでせう、あまり心配し過ぎると、親子三人の病人が出來る、さうなッちやァ、ます〳〵大變だ、幸ひ此方も今日は用がなくッて、暇で、これから何處へ行かうかと思ッてるところだ、もし嫌でなければ、この省三に、せめて、少しの慰安を提供さして下さい、ね、病院の近所に待ッて居るから」

途を歩みながら、さま〴〵に慰め、いろ〳〵に痛はりて、お雪を病院の門前まで送りし省三、

「今いふ通り、あまり長くなると却ッて、兄さンのため、よくないし、第一また看護婦なンかによけいな事を聞かしても、つまらないこッたからね」

「はい、きのふは、幸ひ看護婦さンが居なさいませンので、ゆッくり談話を致しましたか

ら今日は、用の濟み次第、すぐ」

「さうだ、それが宜い、兄さンの身體に付いては十分、遺憾なく念を入れて院長にも受持の醫者にも賴ンであるから、決して心配するに及ばない、時に何の用」

今まで問はむとして問ひ得ざりし省三、それを問はれしお雪、おもはず小脇に抱へし風呂敷包を持ち直して、

「あのウ、兄の、すきなものを、買ッてまゐりましたので」

「はゝア、なるほど、兄さン何が好物」

「お恥かしいもので、御坐います」

「恥かしい事はない、兄の好きな物を、妹が持ッて行くンだ、どンなものでも立派だよ、全體、何」

立派だといはれて猶更ら顏を赤め、差俯いて幽なる小聲、加之も何ぞやら濕み勝に、

「小兒のやうに、鹽餅煎が、好きで御坐いまして」

巨萬の財產を爭うて兄弟の敵となるもの多き世の中に、あはれなる兄よ、やさしき妹よ、わづか一袋の鹽煎餅に美はしき涙の露は滴れりと、省三は片手のステッキに身を支へながら、俄に帽子の前鍔を深く卸して、

「鹽餅煎、すきなものは何でも結構だが、鹽餅煎、どうだらうね、あまり固いものは腸のため、よくないかも知れない、今が最も大切なところだ、やはり醫者に聞いて見ないと、うッかり食物は、持ッて行けない、看護婦でも分るだらうから、そりやァ聞いた上でといとね」

お雪も今更ら氣が付いて、眉を顰め小首を傾けつゝ思案に困りし風情、ますゝ窘らしく

哀れげに見る省三、

「きのふ、兄さんと約束でもして、買ッて來たの」

「いゝえ、約束も何も致しませン、兄が至ッて、好きで御坐いますから、さぞ、喜びませうと、思ひまして」

「や、それなら、寧ろ止した方が宜い、折角だが平常の身體と違ッてるからね、なるべく素人の考へで食物を運ばないに限る、わざと病室は二等にしてあるが、實は賄の方を特別に賴んであるから、決して食物に不自由はない筈だ、まして兄さんが註文しないものを好きだからと、わざ〳〵持ち込むに及ばない」

職工の身で會社のための怪我でもないを、すぐに病院へ運ばれしのみか二等室とは、それさへ嬉しく有難く思へるに、賄を特別にせられしとは、現在の兄も知らざる事、始めて聞きしお雪は神を拜むが如く、頻りに頭を下げながら、無言のまゝ兩眼の溜涙見るに忍びず省三、わざと殊更に笑うて、

「はゝゝゝその鹽煎餅、僕が貰はう、兄さんの物を横取しては濟まないが、優しい心が籠ッてるから世間の鹽煎餅と味が違ッてるだらう、はゝゝゝ」

わづか一袋の鹽煎餅に人生無量の悲哀を與へられし省三、ます〳〵人知れぬ戀に引付けられ、お雪また重ね〳〵の優しき情に引寄せられ、加之も互に今日は其まゝ家に歸れぬ身、一方は例の七人に對するため、一方は電話局の交代時刻まで、折しも午前十時過、

貫は今日、會社の方に少々、小うるさい面倒な事があッてね、わざと出ないし此まゝ家へも歸れないから、どッか夕方まで、ぶら〳〵遊ばうかと思ッてる時だ、さういふ譯で來たとすれば其方も同じ事、やはり歸る時刻に歸らないとお父さんの手前、都合が惡か

らうし、幸ひ二人で、どうですな、こゝから院線で、上野あたりへ、芝の公園や日比谷は、なり〳〵行くが上野は久しく見ない、氣が換ッて、よからうと思ッてるが、それとも鹽煎餅をヌキにして、ちよいと兄さンを見舞ッて行きますかね」

「はい、さう致したいと、思ッて居りますが、きのふ、するだけの談話をしましたから、もう今日は別段」

「ぢやァ却ッて、逢はない方が宜からう、いくら、しッかりして居ても自然の人情といふものは弱いからね、逢へば逢ッたで、また餘計な氣を揉ましたり心配さすばかりだ、しかし折角の鹽煎餅、とンだ奴に横取せられた、はゝゝゝどンなだか、見せて御覽」

聊か戯れて笑ひながら片手を出せば、ひよいと思はず飛び退いて顏を赤めしお雪、ますます固く小脇に抱へ込み、

「あら、いけませン」

「だッて一二枚は宜からう、歩きながら食べたいもンだ」

「ほゝゝゝ」

絶えず涙に濕り勝の此お雪、今日この省三に始めての笑ひ聲、戀の耳に響きし微妙さは、天女の音樂に等し、

「ぢやァ上野へ往ッて、誰も見ない、青々とした木の蔭で、ゆッくり貰はう、それを樂みに、さァ院線へ乘るとしてね」

お雪の歩むところは、いかなる山も川も目に入らず、そのまゝ絲を引かるゝ如くなりし省三、もはや今は此お雪また省三のために我を忘れて、いつしか引かれ行きし院線の電車に乘り込みしが、生憎の滿員に二人とも立往生、平常ならば結句これを幸ひとせる省三、じ

ろ〳〵今日に限ッて四邊を覗ひ、次の驛にて降りし一人の後を見るや否、素早く占領して我まづ腰を打かけながら、そッとお雪を招き寄せ、無理に代りて、嵐に花を圍ふが如く其前に立ち、上野の下の鶯溪に付くまでの間、わざと無言のまゝに過ぎしが、その降りる時また我身を先に人混を掻分けて、うしろを振返りながら、

「あぶないよ、氣を付けてね」

お雪の心は次第に囚はれて、夢うつゝに運ばるゝが如し、

上野の裏口、鶯坂を上りながら、

「今年の花、見ましたか」

「いゝへ、今年になッて上野、始めてゞ御坐います」

あはれ花も見ずかと思ひしが、これを慰め顔に首肯いて、

「花時分は雜沓してね、砂埃を浴びながら雜沓を見に來るやうなもンだ、上野は今に限る、どうだ、堪らないね、この青葉に包まれた工合は、急に頭腦が輕くなッて氣が清々する」

家は一寸の餘地もない貧苦の裏長屋、勤めは間斷なき機械責の電話局、朝夕は絶えず父を思ひ兄を思うて、ほッとする間もなき身に滿山の緑は、いかにも別世界に蘇生りし心地、いつしか平生の憂を忘れながら、うツとりと仰ぎし顔に木の葉を洩れ來る薄日を受けて、猶更に冴え渡る天生の美、省三の目には大理石を以て彫刻せる名工の作物に血の通へるが如し、

「どことい ふ的はないが、ここを歩いても青々として氣持が宜い、博物館も動物園もあるが、やはり氣委せに其邊を、ぶら〳〵してね、草臥れたら休まう」

身を並べて歩かねど、前後に二足とは離れず、自然の不即不離に伴ひながら、

「だしぬけに妙な事をいふが、家へ尋ねて往ッたのは二度、不意に外で三度、つまり逢ッたのは、これで五度目だ」

「まア、よく覺えて、居らッしやる事」

「日は勿論、時間まで、ちやンと覺えて居る、もし小説家なら、いち〳〵その時の表情まで細かく書けるだらうよ、はゝゝ」

「あらッ」

驚きしか、嬉しかりしか、恥かしかりしか平生の聲と違うて、あらと叫びし外、後に續く言葉もなく、省三また暫しの無言に互の胸と胸、

竹の臺より東照宮の社前に出で、用なき五重の塔を巡りて、さらに大佛の下より清水堂に上り、ぐる〳〵と凡そ一時間あまり、

その間に省三の苦心は、もはや正午の十二時、山内より池の畔に和洋いづれの料理屋も自由なれど、貧しき家に育ちて加之も初々しく馴れぬ身に却ッて辛からべしと、思案に餘りしステッキを振廻しながら、わざと淋しき木蔭に入り、幸ひ人なき休み茶屋を見付けて、

「兎も角、あれで休まう、大分に草臥れた、外に客がなくッて靜だ」

形ばかりの掛茶屋に僅の駄菓子を並べて、色の褪めたる赤毛布に古床几を蔽ひ、六十餘りの婆に孫らしき十一二の小娘、いかにも總ての粗末なるを結句の便利として、汲み出せる温き番茶を手に取りながら、微笑を浮べし省三、

「婆さンや、菓子は入らないよ。菓子は入らないが、どッか、この邊で辨當を取ッて貰へまいかね、いくら高くッても宜いから極上等の辨當、はゝア、ないか、なるほど取ッた

事がないから持ッて來てくれるかくれないか、分らないは困ッたね、ぢやア、かうしてくれ、氣の毒だが、そこの精養軒へ往ッてね、サンドウキッチを二人分だけ、現金で買ッて來るンだ、もし無ければ拵へて貰ッてほしい」

ポケットより露西亞革の紙入を取出して、五圓紙幣一枚を婆の手に渡し、

「お剩銭は茶代に置くからね」

サンドウキッチの二人分は、いかに高くとも知れた價、それに五圓紙幣を出して、剩餘は茶代に置くといはれし掛茶屋の婆さン、驚きの目を睜りて、今更に省三の顏を見上げ、その目を其まゝお雪に注いで、頻りに老の腰を屈めながら立去りし後、

「わざ〳〵上野まで引張ッて來て、さンざ歩かした上、赤毛布の床几に腰をかけてサンドウキッチの御馳走は酷いが、わざ〳〵料理屋なンかへ這入るよりも暢氣で宜いとして、まア堪忍するさ、はゝゝゝ隨分お腹が空いたらうねエ」

「いゝへ、どうも御坐いません」

「どうもない事があるもンか、せめて美味い辨當でもあればだが、それも取れないこは少々、なさけない始末で、しかし談話の種になるよ、こンな事のあるのも却ッて面白い、いつまでも忘れないからねエ」

「お辨當なら、持ッて居ります」

「や、なるほど、さうだな、お父さンの手前、やはり電話局へ出る筈だから晝の辨當、なるほど、さうだね、もうサンドウキッチなンか入らない、茶菓子に鹽煎餅はあるし、その辨當を半分、わけて貰へば何よりの珍味だ、こゝへ出しなさい、この靜な自然の風物を背景として一點さらに利益の念も料理の業もないところが無上の味ひだ、さア出した、

出した」

二尺ばかりを隔てゝ床几に腰うちかけし省三、じり〳〵迫りて手を出せば、お雪ます〳〵固く身を縮めて風呂敷包みを小脇に抱へ込み、

「いけません、貴君、いけません」

「何故、さう惜しむの」

「あら、惜しみは致しませんが、あンまりですもの貴君、こンなものを」

「こンなものも、どンなものも構はない、そンなものが却ッて結構だ、恥かしい事があるかね、同じ日本人の食ふもンだ、はゝゝゝだが無理に取らない、しかし鹽煎餅だけは約束濟だよ、こゝへ來る時あの病院の前で、もう既に此方へ貰ッて置いた筈だからね」

「御冗談ばかり、仰しやる事」

「なァに冗談でない、ちやンと約束をして現在、そこに持ッてる物を出せば宜いンだ、かうなれば腕力でも取るよ、喰物の意地は恐ろしいもンだからね、はゝゝゝ」

「ほゝゝゝまだ召上ッた事は御坐いますまいが、ほンたうに、つまらない、まづいもので御坐いますよ」

お雪また顔を赤らめながら、くるりと背を向けて、そッと風呂敷包を解きかけしが、その隙間を覗ひし省三、不意の戯れに手を出してブリキの辨當箱を掴むや否、はッと思はず驚いて其手を其まゝ小脇に挿みし一刹那、いづこよりか耳に響きし聲、

「岡田さン、今日お休みですか」

はッと驚いて見れば、一間あまりの彼方に三十前後の洋服男、わざと二の句を次がず、そのまゝ踵を返して足早に立ち去るや否、嵐に花の凋れし如く、お雪は俄に差俯いて、兩袖

女顔に打震ふ前髪、

省三、あまりの不意に呆れて擦寄りながら、

「だしぬけに今の男、あれは何」

袖より漏るゝ泣聲、

「どうしたら、よう御坐いませう」

「どうするよりも全體、今の男は何だね、それを聞かないと分らない」

「あれは、あの方は」

「何だ、どういふ知合だね」

「あの方は、局で、わたくしなンかを取締ッてゝ、至ッて、やかましい、嚴しい人で御坐いますから」



「ふウ、さうか、さういふ人間か」

暫し無言で腕を組みし省三、もはや何をか思ひ切ッて、いかにも決心の顔色を現はし、大浪の如くに首肯いて、

「いや、惡かッた、此方が惡かッた、兄さンの病氣見舞に往ッたものを、わざ〳〵こゝへ連れて來て、つまらない事から、ふとした冗談をとンだ、奴に見られて、今更ら申譯がない、川口省三、あらためて謝罪しますよ、しかし泣かなくッても宜い、驚くに足らない心配するに及ばない、どうせ、さういふ喧しい嚴しい人間とすれば、無斷で勝手に休ンだのみか現在、あンなこころを一種、猜疑の深い目で見た以上、辯解も何も聞くまい、よし聞いてくれても萬事、もはや後が面白くないから、時の災難、思ッて、すぐ辭職しなさい、この災難を拵へただけの責任は、たしかに引受ける、立派に引受ける、第一ま

た電話局なンか、自分の目的でもなからうし、すき好ンで毎日、愉快に通ッてるンでもなからうし、餘儀なき境遇上、うき世といふものゝため仕方なく勤めて居たとすれば、幸ひでもないが、寧ろ氣を大きく廣く、これを運命の轉換機として外に、どうでもなる、泣く事があるもンか、花が咲いても世間に何があッても片時の娯樂も持たず、あの兄に對し、長の病氣の親に對して今日まで、それほど哀れに苦しンで來た、その報酬だけでも此まゝに消かれないのが當然だ、わざと考へず殊更ら巧まずして、ふしぎに妙な工合から自然に廻ッて來る幸ひは人力以外、つまり神の賜ですよ、ところで、この省三、その神に誓ひ神に捧げる心を以て、盡したい事がある、決して富める男より貧しき女に於ける意味でない、うけてくれますか、よく、わかりましたかね」

お雪、なほ顏の兩袖を放さず、只そのまゝ會釋せるを見て、ほッとせし省三、おもはず小聲の獨り言、

「けふは實に不思議な日だ、今朝あの七人に會社を止めさして、無論、すッかり違ッた事だが、また、こゝで一人、職を辭させるやうになッた、今度は乃公が何を止めるかな」

午前十一時頃より午後の三時過まで、青葉に包まれし上野の山を別世界として、わづかに四時間なれど、その四時間は現在お雪のため、いかに人知れぬ心の浪を打たせしか、いかに生涯の運命を含ませしか、また一袋の鹽煎餅は省三のため、いかに戀の緒を手繰らせしか、いかに滿身の血を湧かせしか、

上野の山を降りて車坂より電車に運ばれ、人形町の終點より乘替へて築地の本願寺前まで、省三に送られしお雪、生れて始めての今日、浮世の底に沈める手を取りて引出された

るが如く、たよりなき不運の身に力草を得たる心地、
小田原町の我家へ歸りしは、電話局の交代時刻を考へて、わざと何氣なく父の前、
「お父さン、今日は、どうでした」
父の久藏、相變らぬ寢床の上に枕を欹てながら、
「いや別に、どうもないよ、このお天氣だからね、平常よりは却ッて氣持が宜かッたくらゐだ」
「全く、好いお天氣でした事ね、この分では、すぐにも夏が來さうですもの、時に今夜、お父さンに相談したいと思ッてる事があるンですよ」
「わざ〳〵夜でなくッても、全體まァ何だい、あらたまッて相談なンて」
「あらたまッて、相談するンぢやァないンですが、あのウね、お父さン、わたし、かう思ッてるの、先達あの方に戴いてある、お菓子の切手やら呉服屋の切手ね、いつまで、あのまゝにもして置けませンでせう」
「だから乃公が、さう言ッてるぢやァないか、切角の思召だ、一枚づゝ戴く事にして、兎も角お前の著物でも拵へろと」
「もし、さうするとして、お父さン、あの殘ッたのを、どうなさる心算」
「さァ其處だ、折を見て其うち何とか、お氣に觸らないやう、お返しせうと思ッてろ、お郵宅へ持ッて往ッて、どンな御都合があるかも知れないし、幸ひ腐る品でもないから當分まァお預りして置いても宜いが、兄の奴め、どうしたンだらう、郵便を出しても歸ッて來やァがらない、やはり元は彼奴の事から、いろ〳〵御深切の末、あゝいふものを下すッたンだからね、皆、戴くには、やはり兄に得心さした上でないと困る、彼奴また例

の氣性で、先樣へ文句の種にでもするこ猶更ら濟まない」

「ところがね、お父さン、わたし實は今日、歸ッて來る途中で、不意に、ふと、あの方へ、お目にかゝりましたの」

「や、さうか、よく、お禮を申したらうな、兄の事に付いて、何こか仰しやッたかね」

「過日、出した郵便で、兄さンの歸らない事も、わかりましたよ、お父さン、兄さンは此三四日以來、どうしたのか、急に、おこなしくなッて、お仕事が、急がしい、さうですから」

「そりやァ有難い、やれ〳〵彼奴、さうなッてくれたか、それぢやァ歸ッて來ない方が宜い、つまり段々と考へて見て、なるほこと氣の付いた事があるンだらう、さうなれば、根が馬鹿でもないからなァ」

「全く、さうなンですよ、その證據には何か、お話しをしたついでに、わたしの事まで、お願ひ申して、不束な妹で御坐いますが、あゝいふこころへ通はして置くのも、可哀さうだとね、ですから今日お逢ひした時、さう仰しやいますの、わづかの日給で時間責めに規則の嚴しい電話局なンかへ行かなくッても、外に、立派な、同じ通ッても、大變に身體が樂で、ずッと今よりも給料の多い、立派な大商店があるから、そこの電話掛りにならないかと、さうすれば乃公が萬事、引受けて、世話をしてやるとね、お父さン、どうしませう、一日まるで勤めなくッても、隔日に午前こ午後だけださうですよ、つまり半日づゝですの、その代り、こンな風俗では、いけないから、あの切手ね、あれを皆、使ッて仕舞ッて兎も角、見苦しくないやうに、著物を拵へろ、足らなければ、いくらでも足して遣るこ、仰しやいますの」

此お雪この父に向うて、これだけの事を言ひ續けしは一生懸命の業、脇の下より冷汗たらたら、

親を思ふの餘、兄を思ふの餘、いつしか我身は義理に搦まれ人情に引かれて、加之も重ね重ね思はぬ不意の出來事に、猶更ら深く餘儀なき自然の成行に運ばれ、ふしぎの運命に誘はれし果は、夢うつゝの如く戀に迎へられ戀に囚はれしお雪、

戀なればこそ此お雪、父の前に生れて始めての虚言を取交ぜ、一點さらに利慾の念なく虚榮の心なきも、親子三人これがために浮ぶ瀬と思へば、

「ねエお父さん、今いふ通りですが、どうしませう、どうしたら宜いでせう」

昔氣質に正直一途の父は、たゞ嬉し涙を老の目に浮べて、

「ま何といふ、御深切な方だらう、お雪、この御恩を忘れちやアいけないぜ、罰が當るよ、兄の奴といひ、お前まで、それほどに思ッて下さるンだ、たとひ此方から這ひ寄ッて、お願ひ申したにしろ、あまり身分の違ッた相手だ、さう萬事お世話をして下さる筈がない考へて見ると、前の世で我々親子は他人でなかッたかも知れないね、全く何かの御緣だよ」

お雪、はッと俄に恥かしく、心に咎めて思はず顔を赤めしが、父は更に氣も付かず、

「隔日に午前と午後の半日づゝ勤めて、今までよりも澤山に給料を頂けるンだね」

「さうなンですよ、ですからね、お父さん、これからは、わたし、半日づゝお父さんの傍に居て、介抱ち出來ますよ」

「構なこッた、おまけに、お預かりしてゐる呉服屋の切手、あれを皆、使ッて、兎も角、著物を拵へろと仰しやるンだね」

「もう、袴なンか、入らなくなりますの、お役所でないンですから」

「なるほど、さうかい、ぢやァお前も始めて年頃相應な娘らしい風俗が出來るンだ、實は毎日、あゝして出て行く後姿を見る毎に乃公は、可哀さうで堪らなかッたよ、さう仰しやれば早速、あれで好きな反物を買ッて來てね　自分の口から現在お願ひしたくらゐだから、もう兄の奴も彼是いふ理由がない、ありがたい、ありがたい、これで乃公の病氣も段々よくなるだらう」

「さうですとも、お父さンの病氣は半分は氣で癒りますよ、また無理にでも氣を持直して、癒ッて下さらないと困りますワ、わたしは、これから出來るだけの介抱も、盡せるだけの孝行も盡す心算ですが、第一お父さンがね」

「なァに心配してくれるな、さうなれば乃公も自然、その氣になッて、しッかりするよ、

ところで今までの電話局へ、どういふンだね」

「それはね、お父さン、都合上、止める事にすれば宜いンですの、明日中に止して仕舞ッて、一週間ばかり家に居ろと仰しやいましたから、その間に著物もね、お父さンの敷蒲團も何も一處に拵へませうね」

「とンでもない、お前あの切手を乃公の夜具なンかに使ッて濟むかね」

「だッて、さう仰しやいましたもの、まづ阿父の寢道具を仕替へてやれと、だから足らなくなれば、いくらでも足してやると仰しやるンですの」

父の久藏、方角も定めず手を合して拜めば、お雪は我身を拜まるゝが如くに苦しく、

「あらお父さン、お父さンが、そンな事しなくッても、わたし、わたしが、きッと御恩を忘れずに居ますよ」

川口省三に說かれて會社を辭せし例の七人、何は扨置き第一まづ岡田に報告すべき義務ありとして、その中の一人、病院を訪へば、一週間の今日なほベットに横はりし貞吉、看護婦を去らしめ扉を固く閉ぢさせ、まだ繃帶も解かざる顏面に微笑を浮べながら、わざと平生の調子に手輕く、

「やァどうしたい、その後は相變らず皆、元氣だらうな、あれ以來、別に何事もないかね、なァに僕の事なンか氣の毒も絲瓜もあるもンか、もう既に濟ンだ事で、加之も間違ッて出來たンだ、レールの上を奔る汽車でさへ君、をり〳〵脫線するよ、もし僕が間違ッて七人の中に居りやァ、この岡田貞吉、生命が無かッたかも知れない、案外お手柔かで結構、有難いくらゐだ、運命の上から見れば禮を言ッても宜いぜ、はゝゝゝ」

ます〳〵頭を搔いて首を縮め、額越に岡田貞吉の顏を見ながら、

「さういはれると猶更ら面目ないよ君、だから今日こゝへ來るのを圖引にしたンだが、運わるく僕が當ッてね、おまけに此奴、この僕たるや甚だ申譯のない野郎で、最初にビール瓶を投げたし、そッと二度目の斥候に捕まッたし、これで三度目の惡い役廻りだ、それを皆の奴等、畜生、面白がッてね、くす〳〵笑ッて居やァがる、癪に觸ッて堪らないが仕方なく來たンだから君、あしからずね」

「よく〳〵お互に緣が深いンだよ、はゝゝゝ冗談を置いて今日、こゝへ來たのは全體、どういふ用だ、乃公の出るまで一切、見舞なンかに來て吳れるなと約束して置いたンだから、まさか、そンなこッちやなからう、また何か始まッたのか、會社の方から何とか切出したのか」

「さ、その事だよ君、いよ〳〵會社は我々八人に對して斷然、首を斬らうと決したらしい、こころで社長の子息、ありやァ阿父の頑固と違ッて、なか〳〵分ッてるね、その朝、不意に押掛けて來て板挟みになッた自分の苦しい立場から段々、いろ〳〵と說き出した結果、寧ろ解雇されない前に辭してくれといふンだ、加之も自分の洋行した時に買ッたダイヤモンドの指環を賣ッて千三百圓、それに三百圓の小遣ひを足した千六百圓、つまり八人に二百圓づゝの慰勞金を出して、これで堪忍してくれといふンだ、さうなれば、もう議論する場合でなく理窟の餘地もないから兎も角、會社は直に辭して仕舞ッたが偖、この後だ、どうしたら宜からうと第一まづ君の意見を聞きに來た、報告、かたがたね」

岡田貞吉、ベットの上に兩腕を組ンで暫し無言の目を閉ぢしが、靜に首肯いて

「なるほど、さうか、さうなるだらう、どうしても結局、あの會社としては、あの社長としては、それより外に手段はなからうよ、しかし子息は出來た人間だ、見たこころは當世流のハイカラで、まだ年も若いが世間普通ザラにある金持の伜と違ッてる、源平時代の重盛といふ役で、なか〳〵澁い藝を遣らかすよ、惜しいなァ彼奴、此方の仲間だと猶更ら面白いが、生憎く横暴なる資本家の子に生れて、敵の方だ、氣の毒だが玉石混合に撲滅せざるを得ない」

「全く、あの人だけには少々、鋒が鈍るなァ」

鋒が鈍るといはれて、忽ち胸に浮びし親の事、わけて妹の事に苦しき貞吉、我みづから我を叱咤する勢ひに總身の痛さも忘れて、おもはず片手の握り拳を宙に振りながら、

「何を、くそッ、情は情、理は理だ、情に於ては忍びないが理に於ては、斷じて許さない、この鋒、鈍ッて堪るもンか」

あはれなる一人の妹を或意味に於ける捨物とし、申譯もない一人の親を其妹に抱へさせ、心に泣きながら無慈悲の兄となり不孝の子となりて、生涯を一貫すべき主義のために忍び、もはや浮世に總ての情愛を斷ち切りし決心、

この病院を出るまでは、なるべく胸に疊みて顏色に包めど、一週間のベットに横はりし沈思默考の結果、自然に溢るゝ言葉の勢ひは、さらに幾層倍の馬力を加へたるが如く、訪ひ來りし味方の一人に向うて首肯きながら、

「どうせ會社は、さう來るに極ッてるし、また此方は追ひ出されても差當り仕方のないところを、ちよいと一歩、お先へ追ン出た工合は宜かッた、あの省三といふ人間、なかなか智慧があるよ、おまけに自腹を切ッて我々八人へ二百圓づゝは案外、うまいところへ金を使ッたよ、しかし今いふ通り氣の毒だが玉石混合だ、いち〳〵面倒な道草を喰ッて個人的の義理や人情に躓いて居ちやア到底、この前途の長い大旅行に無效だからね、しッかりと脚下丈夫に脇目も觸らず眞正面に向いて、どし〳〵歩かうぜ、たとひ味方でも邪魔になる奴は踏み潰して行くのさ、但し間違ッてビール瓶の飛ンで來るのは少々困るよ」

「やア、一言なしだ、大體、かういふ慌てもンだからね、うかうかすると味方に踏み潰される奴、僕かも知れないな、はゝゝゝなるべく君、蟲のやうに踏み潰さないで、人間らしく手を引張ッて往ッて貰ひたい、膝小僧の擦剝ぐらゐは堪忍するよ」

「はゝゝゝ冗談は兎も角、いよ〳〵天下ア廻り持の時が來さうだから、全くの眞劍勝負で、今日勞働者と資本家は睨み合の眞ッ最中だ、此方の追ッかける足が早いか、向ふの遁げる足が早いか、乃至また兩方から互に進ンで、ばッたり中央で斬結ぶか組打するか、考

へりやア考へるほど面白い、愉快で堪らない世の中だよ」

「その時こそ君、僕が得意の藝當で敵の大將を覘ひ、不意にビール瓶を投げても宜からう、君には濟まないが一度、もう手心が分ッてるから今度は巧いぜ、續けざまに二三ダース」

「ば馬鹿な事いへ、もし覘ッて投げるなら投げるもの、外にあるよ、だが實際、それにも及ぶまい、自然の大勢に乘じて、いはば風上から火を付けるやうなもンだ、最も近くて誰にも分り易い一例を揚げて見ると、わざ〳〵飛び放れた外國を引出すにも當らない、現在、我國に於ける維新の革命、あれを君、どう考へる、一方は三百年來、牢として拔くべからざる武斷政略の大地盤を築いて來て、いはゆる神君の餘光、天下を丸呑にした將軍家だ、それに向ッて各藩の素浪人、加之も多くは身分の低いもの許りで痩腕を叩き始めた當時、これを絶對無上の權威とする葵の御紋より見下せば芋殼を以て岩石を打つが如く、まるで談話にもなッて居ない、彼奴等が騒いで何をするかと面白半分に冷笑ッたらうが、瓢簞から駒が出るよりも灰吹から蛇が出るよりも豈圖らンやだ、その痩腕の素浪人が竟に十五代連綿たる德川家を覆して仕舞ッた、つまり強者の續いた絶頂は即ち強者の滅亡すべき時節到來で、多年の壓迫に虐げられて來た被征服者、即ち弱者の大勢に一醒めた爆發は征服者を倒すべき自然の運命だ、今日の資本家に對する勞働者は恰も幕府に對する痩浪人で、無論、多少の犧牲は免れないが、今に見ろ、きッと社會の大勢は我々を助けて凱歌を奏するに極ッてる、近頃あの温情主義とか協調主義とか或は融和共濟々々名として雙方の間に、彼是する人間は、維新の當時、勤王とも付かず佐幕とも付かず曖昧なる公武合體を唱へたと同じ筆法だ、どンな地位の奴でも、いかなる名聲を持

ッてる奴でも、過去に得た地位や名聲で實際この問題が徹底するもンか、革命だよ、資本家對勞働者の革命が來たンだ、はッきり黑とも白とも分らない鼠色の奴が出る幕ぢやアない、あやしい大鼠の出る幕は千代萩の床下に限るンだはッはッはッ」

岡田貞吉、さらに言葉を續けて、滿面の微笑を浮べながら、

「またビール瓶を持出すやうだがね君、この額の疵も實は、もう宜いンだよ、あの工場醫者め例の職工扱ひで、無雜作に洗ッた上を繃帶したンだが、こゝへ來た晩、すぐ三針ばかり縫ッてくれて、その後の手當も十分だッたから案外、早く癒ッたし、身體の方も今日で一週間、熱が出たり痛かッたりして動けなかッたのは丸三日ほどで、もう大丈夫だ、現に今朝も醫者が診て、さう言ッたよ、殆ど全身に隙間のない打撲傷だから普通の身體なら、なか〳〵一週間や二週間で起きられない、きッと何か餘病の出る筈を珍らしい經過良好だと驚いて居たが、この一言を聞いて、おもはず僕は自分で自分を祝福したね、前途將來、赤裸々を以て戰ふべき僕の武器は只この頑健なる個體にありで、加之も以前より寧ろ心身の爽快を覺えて、ずッと宣くなッた氣持がする、つまり頭は泥溝を淺ッたやうに、よけいな古血を出して仕舞ッて、身體は袋叩きに叩き伸された結果、新に張り替へたやうなもンだ、考へて見ると岡田貞吉、さらに勇を鼓して出直すべき運命を作ッたと同じこッた、はゝゝゝ人生、何が幸ひになるかも知れないね」

「いや、君だから、さうだよ、もし外の奴なら身體が癒ッても、第一まづ氣が凹垂れて、まゐるね、おまけに溜飲の下げ場がなくッて、我々七人を告訴するぐらゐが關の山だ」

「まさか、さうでもあるまいが、兎も角、僕の身體は世間の普通以上の頑健なる事を試驗されて、試驗の成績上、まづ優等製たる保證を與へられたからね、安心してくれ、將來

に向ッては、いはゆる文心獸身、頭腦は新らしく文明的で身體は獸の如く原始的でなければ無效だ」

「頭腦の方は少々怪しいが、身體は我々七人も、あまり弱くない方で、惡達者に出來てゐるからね、はゝゝゝ」

「惡達者といふ事があるかい、惡達者といふ言葉は、ひよろ〳〵と青白い奴を上品な人間とした時代の反語だ、ありがたく結構に達者だと言へよ、神聖なる勞働者の叫びは筋肉から出るンだ、時に僕は明後日、いよ〳〵こゝ三日で退院するよ、醫者は醫者で萬全を期する職責上、まだ早いといふに違ひない、また例の省三氏、以後あれだけには聊か敬意を表して氏の字を付けよう、これも好意上、きッと引止めるに相違ないが、もう大丈夫、僕は斷じて出る、必ず出るからね、二百圓づゝ貰ッた金の始末も、今後の方針も、その他に於ける總ての一切は、僕の出るまで待ッて居てくれ、この病院は僕の身體を癒したばかりでない、このベットに横はッた一週間の沈思默考中、よほど得た事がある、よほど蓄へた事がある、なか〳〵面白い策もあるよ、いよ〳〵今度こゝを出れば態度一變、今までのやうな手ぬるい一本調子でなく、縱横無盡だ、はゝゝゝ寧ろ愉快で堪らない、虎を野に放つといふ言葉はあるが、資本家の方から見れば、とンでもない奴を病院へ入れたと、はゝゝゝ」

父の久藏は神佛に救はれたるが如く喜び、お雪は薄闇き浮世の片隅より手を引出されたるが如く、頭と胸と連續の機械責にせられし電話局を辭して、ゆッたりと我身に返りし嬉しさ、氣も晴〻〻と冴え亘りし顏色の美はしさ、

そろ〳〵給の時候は過ぎかゝりて、まだ素肌の單衣には早き季節、セル地に薄襦袢といふもの、いかに身輕く著心地のよきかと、これを今まで世間の餘所に見たばかりのお雪、繼目なしに通りし腹合せの帶も、生れて始めて都下第一の呉服屋に誂へ、お屆け致しませうといはれし時、はッと思はず顏を赤めながら、その日を定めて請取に行く約束、

その約束は今日、いつよりも早く目は覺めて、いそ〳〵と立働き、朝餐の濟みし後、

「ねエお父さン、けふで四日になりますが、久しぶりで、お父さンのお給仕しながら、ゆッくり朝の御飯を食べますワ」

「全くだ、乃公の事は、どうでも宜いが一年半の間、可哀さうに毎朝お前の落著いて食べた事を見なかッたよ、これも皆お雪、あの方の御恩だぜ、忘れちやア濟まないぜ、おまけに今日は一昨日、誂へたといふ著物と帶の出來る日だらう」

「ですから、わたし今朝、もう一時間もしたら、請取に行かうかと思ッて居ますの」

「外に用がないから、すぐ出掛けるが宜い」

「だッて、あゝいふ大きいところは、ちやンと開ける時間が極ッてるンですよ」

「なるほど、や、さうだ、近處の八百屋や小間物屋と違ッてるンだな、はゝゝゝ」

「お父さン歸りには、おみやげ、あの切手で、お菓子を買ッて來ませうね」

「ありがたいな、著物も菓子も買物は切手で買ひに行く電車の乘車券まで添へて下すッたンだ、しかし勿體ないぜ、あンまり一時に澤山は、なるべく冥加のため、入るだけづゝ割ッて戴く事にしないこね」

「そりやァお父さン、わたしも、さう思ッて居ますよ」

「向ふ樣が御深切にして下さるほど、此方は此方の身分を考へて、つけ上らないやう遠慮

するのが當然だからね、その覺悟で往ッて來な」

「はい、では、ちよいとね、すぐ歸りますよ」

「なアに、さう急いで歸るにも及ばない、たとひ半日づゝの勤めでも勤めとなれば、また自由に出られないからね、幸ひ今のうち、氣樂に見たいものも見て來るが宜い、あらたに今度お世話して下さるところへ行くやうになるのは一週間か、遲くて二週間だと仰しやればその間お前の盆と正月だ、はゝゝゝ」

「さう聞くと何だか却ッて、わたし、がッかりと草臥れたやうな氣がしますよ、何故でせう、樂な筈だに、ふしぎですね」

「長らく氣を張つて居たのが一時に弛んだからね、それが安心草臥といふンだよ」

「ほゝゝゝ安心しても草臥れますか」

おもはず嬉しげに笑ひながら我家を出でしお雪、足の運びも今日は常より輕く、何とやら絶えず差俯きし顏さへ俄に晴々しく艶々しく振上げて、いかなる末を見るか女一代の運命、そもやこれが浮世の首途、眩きばかりに現代式の華奢を極めしデパートメントストアに向うて、

デパートメントストアの入口より吸ひ込まるゝ人間を見れば、天下泰平の極、どこに生活難の叫びあるかと思はるゝほどの群集雜踏、例の切手あればこそ、活動寫眞さへ覗きし事なきお雪も亦この雜踏に揉まれて、眩ゆき現代式の華奢場裡に入りしが、虛榮滿々たる人の影に身を潛めて、脇目も觸らず約束の賣場に急ぎ行き、註文の品を請取るや否、そのまゝ直ぐに歸らむとして、と見れば、川口省三の後姿、

今までは幾度も彼方より見付けられしが、我身より不意に見付けしは今日が始めて、はッと思はず人の知らぬ顔を赤めながらも、何ぞやら忘られぬ上野の山、けふで四日目、もはや無縁の他人といふ氣もせず、さりとて流石に嬉しき聲は出ず、歸るべき我を忘れて、その後姿を守り行けば、ふしぎや男物に少しの目も遣らで、いち〳〵當世風の女物ばかりを見廻りしが、後より急ぎ行く人に突かれて、これを避けむとせし途端に振返り、

「やア」

見られたくもあり、見られたくもなし、やアといふ聲を浴びて今更に恥かしく、遁げ場も隱れ場もなき小腰を屈めながら、頬越に冴え渡りし目元を張切り、そッと仰げば、これ幸ひの省三、溢るゝ滿面の微笑を浮べ、

「宜いところで逢ッた、もう何か買物をしたの、まだかね」

「はい、あのウ、おかけさまで、誂へたものを、取りに參りまして」

「さうか、どんな物を拵へたね、兎も角あの休憩所へ行かう、こりやア好い都合に逢ッた、思ひがけなく好い工合に逢ッたよ、はゝゝ隨分、大變な人だねエ」

「わたくしなンか、まご〳〵致します」

種々雜多の客に隙間もなく、往來の道路よりは却ッて人目に立たぬを結句の幸ひ、休憩所に入りて、わざと窓に向ひ外を見ながら腰うち掛け、埃及莨の煙を心地よげに吹いて、

「今日こゝへ來るのは、お父さン承知して居るだらうね」

「存じて居ります、さう申して、まゐりましたから」

「何か買ッたの」

「著物と、帶とで御坐います」

「どういふ著物」

「もう、そろ〳〵暑くなりますから、セルの單衣と、晝夜帶」

「帶の地は」

「薄い色の繻子と、荒い模樣の、身分に過ぎますが仕方なく縮緬と、腹合せに致しまして」

「あれで、足りたかね」

「まだ、よほど、餘ッて居ります」

「餘さなくッても宜いに、はゝゝゝあれは、あれとして今日、幸ひだ、別に欲しいものを何でも買ッてあけようね」

「いゝへ、結構で御坐います」

「遠慮は入らないよ、實はね、どンなものが、よく似合ッて、どういふものが氣に向くだらうと思ッて、わざ〳〵それを見に來たぐらゐだ、決して遠慮するに及ばないから、すきなもの、何でも取るが宜い、この階上に金屬類も澤山あッて、いろンな指環が出てるよ」

四月以前、青々とせし上野の山の森影に人知れぬ心の浪を打たされ、今また若き女の責道具を遺憾なく備へたるデパートメントストアに出逢うて、休憩所の窓際に並びながら憎からぬ省三の優しき微笑に包まれ、加之も今日こゝへ來りしは我ために似合はしき女物ばかりを見立てしといふ言葉に虚僞なく、現在それを背後より附歩きしお雪、まして不運なる浮世の力草、只この人に救はるゝかと思へば、もはや何とせられても自由自在、省三また待合でなく料理屋でもないを結句の幸ひとし、人混の目立たぬ混雜に却ッて安心

しながら、悠々と貢の煙を吹き出し、

「今いふ通り實は、さういふ理由で來て、思はず逢ッたのは不思議だ、何でも、すきなものを買ッてあげるからね、遠慮は入らない、どういふもンが欲しい、まさかステッキや兵兒帶でも無からう、はゝゝゝ」

をり〳〵省三も近頃は心易げに戯れ、お雪も近來は何とやら次第に打解けし笑ひ聲、

「あら、御冗談、ほゝゝゝ」

「兎も角も二人で、も一度、ずッと見て歩かうぢやないか、雙方これが宜いと思ッたものをね」

「いゝえ、わたくし、結構、もう澤山で御坐います」

「まだ、そンな事をいふよ、優しい顔をして居て、なか〳〵强情だね」

「だッて、あンまり、勿體なう御坐いますもの」

「勿體ないといふ事があるもンか、勿論ないといふのはね」

俄に聲を潜めて、そッと四邊を見廻しながら、

「勿體ないといふのはね、今日こゝへ大勢この通りの客で加之も七八分は女ばかりだが、よく御覽、どれも、これも、あらンかぎりの贅澤を盡して、いはゆる滿艦飾の競爭だ、必要の買物に來るよりも自分の風俗を見られに來るのが重で、お互に負けず劣らず立派に粧飾しては居るが、偖その立派な贅澤に相應した女は幾人ある、ろくでもない顔に白粉べた〳〵塗り立てゝ虛榮滿々と著飾ッた工合、勿體ないぢやアないか、中には亭主を泣かして無理に工面さしたものもあらうし、親に借金さして不孝な買物するものもあらうしね、あンまり人間と粧飾の不釣合が酷過ぎて、寧ろ滑稽なくらゐだ、どッかの奥さ

ンだらうが先刻もね、猿のやうな赤い顔で頬骨の高い四十面の反ッ歯を剝き出しながら年にも恥ぢず、その衣裳萬端の若々しく派手に作ッた贅澤さ加減まるで、流行の看板を背負ッて呉服屋の廣告に歩いてゐやうなもンだ、つまり勿體ないといふのはね、金のあり無いに拘はらず、身分の上下に拘はらず、容貌に粧飾の統一を缺いて人間の綜合美を失ッた無意味の結果、飾れば飾るほど見苦しいといふこッた」

お雪は四邊を憚りながら、

「まア、お口の悪い事」

「全くだよ、そこでね」

何氣なく窓際に出せるお雪の手の甲を、指に挿みし埃及産の金口にて、ちよいと輕く突きながら、

「どンなだか、この女に相應の衣裳を著せて見たい」

はッと驚いて、お雪の見上げし目元を、わざと知らぬ顔の省三、

「どうだねあまり、虚榮的の流行めいて、けば〳〵とした風は、よくないが、自然美を害はないやうに一度、自分の思ッた通り遺憾なく作ッて見たい、これは西洋にッた談話だがね、或國の大金持で、その一人息子に父母親戚が寄ッて集ッて頻りに嫁を貰へと勸める、この嫁といふのが容貌も性質も實際、あまり好くないが爵位の高い貴族の令孃だから、つまり平民の金持が金の勢ひで地位を得ンとするためだ、ところが息子どの案外の新らしい頭腦で、寧ろ貴族は大の嫌ひ、まして生涯を伴ふ妻は愛より生ずべきものだと頑張ッて、なか〳〵承知しないに拘はらず、父母親戚が無理往生に押へ付けようとしたから、息子どの頗る面白くない、癪に觸ッて毎日々々我家を飛び出し、どこを的とも

なく、氣を紛らすために歩き廻ッた或日の事、ふと途中で逢ッた一人の娘、いかにも氣の毒に貧しい境遇と見えて、あはれにも粗末な風をして居たが、天生の美、名畫の脱け出でたるが如くで、おもはず我を忘れながら、そッと後を蹤けて行くと、可哀さうに果して町外れの小さい弊屋に住ンで居る、おまけに兩親を養ふため或會社の女事務員として、加之も勤勉の模範的になッてる事まで、すッかり調べて歸ッた息子どの、始めて、うまれで始めて、戀といふものを知ッた」

語りながら、お雪を見れば、窓の外より吹き來る風に冷さむとすれど、ます〳〵赤き顏の色、無言のまゝ横に反けて差俯きしを、聊か慌て氣味の省三、すぐ口早に續けて、

「しかし人は貧しきために賤しいもンでない、どれほど金があッても心の賤しいものは却ッて世の中に多い、現在その息子殿は金錢を以て地位を高めンとする彼の心を、なさけなく思ひ、一人の我子に嫌な嫁を強ひて取らうとする親の心を淺ましく思ひ、煩悶と憂愁の結果、いろ〳〵に手蔓を求めて例の娘ご心易くなり、段々その性質を知れば知るほど同情に堪へない理由もあり猶更ら深く戀は募ッて來たが、一方に親の强制的ます〳〵激しく、貴族の令孃また喜ンで頻りに蒼蠅く交際しに來るといふ始末、流石その中で公然と自分の戀人に結婚も申込まれないから、苦しまぎれに仕方なく、かういふ家に生れたる不運と諦め、自分は生涯の獨身と決心したが、深く心の底に刻み込まれた戀は到底斷切れない、寢ても覺めても忘れる事が出來ない、そこで息子殿、例の娘に向ひ、この苦痛と悲哀を次第に幾分づゝか薄らぐため、せめての心遣りに自分の思ふ存分お前の身體を飾ッて見たい、お前の美を害はない極度に於て、あらンかぎりの我心を籠めた衣裳を著せて見たいそして自動車に乗せた上、自分の力に及ぶだけ慰めて、お前を妻として

迎へる慾望は餘儀なく捨てたが、お前を愛する戀の一端を事實に盡さしてくれ、將來、いかなる良人を持ッても、持たなくとも、他に契約の出來た以上、もはや決して再び逢はないから、それまでの間この煩悶を助けてくれと、泣いて賴ンださうだ、我國とは人情も習慣も大に違ッた點はあるが、ごう考へるね、あはれに痛々しく悲慘な戀ぢやアないか」

いつしか自然に引寄せらるゝが如く耳を傾けて元來の涙脆きお雪、おもはず低き小聲に、

「その娘さン、どう、お答へ、したでせうかねェ」

「それは今度、また逢ッた時に話さう、はゝゝゝ」

現代式の華奢を極めたるデパートメントストアにて、川口省三に出逢ひし、お雪は、かくれし夜の花の朝露をうけたる如し、

今の境遇にダイヤモンドの光りは、あまり眩ゆく輝き過ぎて面白からず、今の年頃に眞珠は何とやら沈み過ぎて若々しからぬところありこ、價の高下よりも寧ろ對照の美を第一にルビー中の優等品、

その赤き色をお雪の白き指に箝めさせて、さも心地よけの微笑を浮べし省三、聊か時刻は早けれど食堂へ伴ひ行き、また窓際の片隅に差向ひながら、

「こゝは極ッた膳で、別に御馳走は出來ないが手輕に簡便だから却ッて宜い、もし御飯が足らなければ、おすし、お菓子、お汁粉、何でも構はず、どし〳〵詰め込むさ、はゝゝは」

「まア、ほゝゝゝ」

薄闇き運命に育ちて心も晴れざりし身に、光るものゝ添ひしは生れて始めての今日、をりをり下を向いて、膝に置ける我指を他人の如く、そッと見ながら、包みきれぬ嬉しさの禮も得いはず、たゞ恥づかしげの苦しまぎれに、

「もう、何時で御坐いませう」

省三、我胸の鎖に手も觸れず、そのまゝ食堂の大時計を振返りて、

「まだ、十一時、ちよいと過ぎたばかりだが、歸る時間、お父さンに言ッて來たの」

「いゝえ、何とも申してまゐりませン」

「ぢやア急くに及ばない、こゝで午御飯を濟ましたら、また廻ッて、今度は著物だ」

「あら、さう澤山、困ります」

「いや一度、困らして見たい、どのくらゐ困るか、今日は幸ひ困るだけ困らして見よう、逃げるこ追ッかけるよ、はゝゝゝ冗談は置いてね、櫛か簪か、何か頭のものを、いッそ束髪にしたら、どう、きッと束髪は、よく似合ッて、うつるに相違ない」

「だッて、人樣が、笑ひませう、生意氣だこ、こンな頭髪、ごうでもよろしう御坐います」

「馬鹿な、誰に遠慮が入るもンか、自分の頭を自分で好きにするンだ、束髪々々、下町風の日本髪も決して惡くはないが、いはゆる女神流に出來てる、その顏で、束髪は猶更ら自然に叶ッた調和の美を增すよ、しかしね、あまり廂を大きく張り出して背後から見た時、まるで鍋蓋を押し伏せたやうなのは、いけない、今日こゝへ來てる連中は、殆ど鍋蓋式の行列だ、あれなら寧ろ思ひ切ッて、くるゝ坊主の尼さンになッた方が見よい、

はゝゝゝ」

笑ひながら他人の悪口を取交ぜて、そろ〳〵お雪の頭へ註文を仕かけし省三、それを不思議とは思はず、お雪も亦その氣になりて、いつしか次第に我を忘れつゝ打解けし風情、折しも運び來りし膳は二人分なれど、その間に置かれたる飯櫃は一個、わざと省三お雪の茶碗を取れば、おもはず慌てゝ其手を押へしは白き指に赤きルビーの光、額越の冴えたる目元に睨むが如く、

「まア意地の、お悪い事」

「かうなれば、●何をしても悪いンだね」

「ほゝゝお悪う御坐います」

お雪に給仕せられて、まづ箸を取りし省三、いかに人知れぬ心の満足を得たりしぞ、ずらりと食堂を見渡しながら、さも得意ゆの誇り顔、今日この中に我と等しき快樂を有するものありや否やと、

十七年の今日までを闇き浮世の夜とすれば、そろ〳〵運命の曉方に近づきて、はや東天の白みかゝりし心地しながら、いそ〳〵と歸り來りしお雪、

本願寺前より電車を降りて、備前橋を渡る時、流石に何とやら心に咎めしか、左の手に光りしルビーの指輪、そッと拔取りて紙に包み、胸帶の間に深く差入れ、その上を輕く叩きながら、小田原町の路地を急ぎ足に我家の門口、

虚榮のために因はれず現代式の華奢にも醉はぬ身なれど、晴々しく眩ゆきデパートメントストアを見たる目には、また今更に穴の底へ這ひ込むが如し、

「お父さン只今」

待ち受けし父の久藏、病める頭を持ち上げて我身も今日は嬉しく、

「おゝ歸ッて來たか、ゆッくり今日こそ上野か淺草へでも廻るかと思ッたに案外、早かッたね、どうだッた、誂へたものは出來て居たかい」、

朝の九時より今は午後の一時過、うかゝと食堂にも暇を取りて、案外に遲くなりし筈を、早かりしといはれて、おもはず顏を赤めながら急いで風呂敷を解き廣げ、

「お父さン、見て下さい、ね、もう直ぐ、この時候ですからセルの單衣と、こンな帶、繻子と縮緬の晝夜ですよ、お襦袢だけはわたし樂みに縫ッて見たいと思ッて、半襟と一處に布地を買ッて來ましたの、歸りに此お菓子、お父さン外のものよりも、これが宜いでせう、カステラ、箱なンか無駄ですから、潰れないやうボール紙を下に敷いて貰ッて、紙に包ンで來ましたワ」

「やァ結構だ結構だ、有難いこッた、新らしい著物も帶も出來るし、お前の身體も今までよりは樂な勤めになるンだし、親甲斐のないくせに、この乃公まで久しぶりでそンな大きいカステラを丸ごと戴けるンだ」

「お父さン、まだ澤山お菓子の切手が餘ッてるンですから、すきなもの、何でも買ッて來ますよ」

「勿體ない、さう一時に遣ッちやァ罰が當るよ、だが乃公と違ッてね、これから前途、お前は世間へ出る身體だし第一また年頃だから、どうせ御恩になるンだ、殘ッてる切手で今のうち出來るものを拵へて置くが宜い、あゝいふ身分の方が萬事お世話を下さるとなれば、見苦しいのは却ッて失禮に當るよ、頭髮なンかも亂さないやうに毎日、なるべく

氣を付てね」

「お父さン、わたしね、これからは、束髪にして仕舞はうかと思ッてるンですが、どうでせう、いけませンか、もう日本髪は、何だか面倒で、うるさくて、つく〳〵厭になりましたワ」

「そりやアお前の勝手だ、厭になッたら、好きなやうにするが宜い、しかし束髪は始めてだな」

「似合ッても、似合はなくッても、わたし今日から、もう束髪に極めましたの、實はね、お父さン、束髪の櫛や、ヘーヤピンといふものを買ッて來ましたの」

「はゝア、ヘーヤピン、何のこッた」

「束髪を、こめる、飾りなンですよ、なぜ今まで、こンな手數のかゝる日本髪に、結ッて居たンでせう、早く束髪にすれば宜かッた」

こゝまで口へ出せど、そッと胸帶の間に忍ばせしルビーの指環は、父の手前まだ憚りて忍ぶ戀、

---

この病院に運ばれしより十日目、いよ〳〵今日は退院と決せし岡田貞吉、まだ四五日は早しといふ醫師に向うて、

「いや、もう結構です、昨日のお言葉では額の疵も殆ど全癒しましたし、また身體も十分、元の通りになりましたから、自分としては、もはや繃帶の必要もないくらゐに思ッて居ますが、念のため今日これを仕替へて戴いて二三日の後、解けば宜いかと考へます、甚だ勝手ながら出ました後で、どうかこの事を川口さンの方へ、若主人の省三氏へ電話

で宜しく、お通じを願ひます」

いかに止めても止まらず、實は三日以前に七人の名代として例の男の來りし時、自己の一人分に割り當てられし二百圓を請取りしため、看護婦に命じて、十日間の入院料その他の勘定一切を會計掛に請求せしめしが、その請求書よりも早く自動車を飛ばして駈け付けしは川口省三、不意に病室の扉を開き、猶更ら近來の打解けし調子に滿面の微笑を浮べ、いかにも馴々しく、

「やァ君、今日、出るさうだが、も少し居ッた方が宜いぢやァないか、自分では、いくら大丈夫だと思ッても醫者の方で、まだ早いといへば、早いだけの理窟があるンだから、さう急いで出るにも及ぶまい、なるべく大事を取ッて、あとの養生を遺憾なく十二分にして貰ひたいね」

岡田貞吉、容も言葉も改めて、慇懃に感謝の頭を下げながら、

「有難う御坐います、岡田貞吉、謹んで、お禮を申し上げます、おかけさまで、幸ひに餘病も起さず、この通りになりましたから、この上、一日も御厄介になるのは、あまり世間並に贅澤過ぎます」

「はゝゝゝさう、いはれると困る、さういふ意味でなく、まァ、もう四五日、素人考へを出さずと、やはり醫者の指圖通りにした方がね、十日も二週間も同じこッて僅の違ひだ」

「わづかの違ひですから、この邊で、出たいと思ひます、折角の思召、それを無にする譯では御坐いませンが、實際、もう大丈夫です、もう確です、この繃帶を解いて御覽に入れませうか、身體の方も、お望みとあれば一番、手足を跳ねて體操を致しますよ、はゝ

はゝゝ」

大口を開いて高く笑へば、この塲合にも迫らずして洒落氣の出る男と、今更に岡田の顏を打守りし省三、また思はず笑ひながら、

「なるほど、その元氣なら宜からう、ぢやァ無理に止めない、强ひて止めないがね、すぐに出ずとも、けふの夕方にしてほしいもンだ」

「はゝァ、何か、お談話でも御坐いますか」

「實はね、いよ〳〵君が退院するとなれば、その前日こゝで、固く扉を閉めて、二人、差對ひの上、ゆッくり談したいと思ッて居た事が」

「や、さういふ事なら只今、承はりませう、お話しの工合に依ッては、この岡田からも、一言、申し上げで置きたい事が御坐います」

看護婦を避けしめ病室の扉を固く閉ぢて、岡田貞吉に向ひし川口省三、猶更ら打解けたる微笑を浮べながら、

「いよ〳〵退院と決心して今日こゝを出た以上、もう君と親しく笑ッて話す事は當分まァ、ちよいと出來ないかも知れないね」

岡田貞吉、靜かに首肯いて、

「遺憾ながら、勢ひ餘儀なく、さうなりませうが、今日までの御恩は、決して忘れません、露骨に申せば、寧ろ自分の味方に助けられたよりも幾層倍、猶更ら有難く感謝します」

「なァに君、恩も感謝もないよ、理想の上に於ては君も僕も同じ一致點を持ッてるから敵も味方もないが、さしあたり困ッた事には社會の表面に現はれてる境遇の相違で、つまり互の居所が違ッてるンだ、全部の財産も權利も我所有であれば兎も角、今のところは

現在まだ親の子として立場が違ッてるから、どうも仕方がない」

「いや、その邊は萬事、よく承知して居ります、お言葉よりも、より以上に諒解して居ります、實は近來まで、やはり我々に對して御親父と同一の方だとのみ、考へて居りましたから、をり〳〵失禮な事を申し上げたり、また穩かならぬ態度も屢々お目に這入ッたで御坐いませうが、今日では全く、謝罪の念を持ッて居ります、わけて入院の三日目、外國の或電氣職工が富豪を呪ふの餘り滿都を闇黑ならしめた間一髪、我子の外科療治を施すことが出來ないで死に至らしめたといふ飜譯文、あれを、お送り下さいました時、この岡田貞吉は何ともいはれぬ一種の鬼氣に襲はれて、賤しい一個の職工も其責任の重大なる事と、その恐るべき因果律の嚴しい事を深く感ずると共に、例の奴等七人のため全身の袋叩きに遇ッたよりは猶更ら痛く、辛く、苦しく骨身に沁みた事が御坐います、

現在この岡田にも御承知の通り、年を取ッて長の病氣に寢て居る父はあるし、あはれに碧らしく其日を働いて居る、妹もありますからなア、うき世といふものゝ苦痛を猶更ら深酷に感じました、其日暮しの貧しき身に主義を貫かンとすれば、男泣きに泣きながらも家を捨てざるべからず、また父と妹を顧みれば、殘念ながら主義を捨てざるべからず、いづれにならうかと一時、あの飜譯文を前に置いて此ベットの上で暫く腕を組んだまゝ考へ込みましたが、結局、岡田貞吉は父に不孝の子となり妹に對して無慈悲の兄となり、主義のためには犧牲となるべき覺悟を極めました、いはゆる長いものに卷かれ强いものに從うて、おとなしく無事に其日を送れば、どうなり、かうなり親子三人、まさか餓死もしますまいに何故、かういふ强情な理窟ッぽい損な奴に出來ましたらう、こゝに至ッては飾りッ氣も威張ッ氣もない眞實の告白で、これだけの愚痴を正直に滾しますよ、

はゝゝ」

笑へども平生の笑ひ聲と違うて何とやら淋しげに一種の悲慘を帶び、加之も兩眼に溢るゝ涙、猶も言葉を續けて、

「いかなる不運の場合も、いかなる苦しい事があッても、どうせ犧牲を拂ふべき覺悟で出發した主義のため、第一また男としての面目上、決して弱い音を吐くまいと思ッて居りましたがやはり無效だ、うき世といふものに責拔かれて見ると案外、自分ながら人間の脆い事を始めて知りました、いくら口では痩我慢を張ッて居ても實際、腹の底を正直に打明けて白狀すれば、この身を產ンでくれた親の事、現在の血を分けた妹の事、ごうしても氣になッて堪りませン、それがため今更ら凹垂れもせず主義も捨てず志も枉げず、あくまで行くべき道は行きますが、身輕に親同胞のないものよりは、ずッと荷が重くて動もすれば足首に石臼を縛り付けられたやうな工合になッて叶ひませン、愚痴な事ながら、この際この岡田貞吉、もし獨身ならばと考へますよ」

たとひ火水の中に飛び込むとも覺悟の上で、ぐッと其まゝ息を呑ンで自然の成行に任すべき男と思ひの外、今この病院を去るに臨みて何とやら打凋れながら、父の事と妹の事に脆くも愚痴を滾せし哀れさ、人の憂ひを喜び人の弱味を僥倖とするにあらねど、その哀れさを川口省三の心に取れば渡りに舟、おもはず、首を伸ばして聲を潛め、

「いや世の中は總て君、さうしたもンで、なかなか自分の思ッた通りに都合よく行かないよ、やはり僕にしても僕は僕でね、また君と同じやうに、いろ〳〵と人の知らない苦勞があッたり面倒があッたり、さま〴〵の支障があッて、年中それがために困ッてる、しかし社會に對する主義を別としての君なンかは、失敬ながら境遇上の處置が容易で、

いはゞ寧ろ單純の方だ、親父さんと妹の事さへ心配なければ、それで宜いンだからね、わけのないこッた」

「寧ろ單純と見えますかね、なるほど貴君の身分からは、わけのないこッてせうが、その日を働いて食はざるべからず生きざるべからずといふ境遇では、人間の生命を保つ事が何よりも第一の難事で、その難事を三人分も背負ッて、おまけに自分の主義を犠牲的に貫かうとすれば、なか〳〵の容易ならン大仕事です、貧は諸道の妨げといふ古い諺を、さらに新しく沁々と骨身に徹して感じますよ」

「や、さういへば、さうだが、つまり君は生活上の不幸と主義の貫徹と兩方の難事を一人で背負ッて行かうとするからだ、どうだらうね、もしこゝに君のため、その生活難を引受けるもの、忌憚なく露骨にいへば、親父さんと妹の一身上を引受けて安樂に保證し得るものがありとすれば君、その人に任す事は出來るかね、無論、人にもよるだらうが君の考へで兎も角、この人ならばと信じた上だ、結局、君に何等の顧慮なく安心を與へ得る人間で、あの父と妹を確に引受けると誓へば、どう返答する」

岡田貞吉、差俯きしまゝ不意に川口省三の手首を握りて、男泣きの聲を曇らせながら、

「お頼み申します、お願ひ申します、實は、そゝそれを言ひ兼ねて居ッたのです、たとひ卑怯な奴と見られても、意氣地なしといはれても、岡田貞吉、この事だけには、甘ンじて卑怯な奴となり得心の上、意氣地なしとなッて、父の事、妹の事、偏に、おすがり申します、御承知の通り阿父は昔氣質の正直一途で、決して御恩を忘れるやうなものでは御坐いません、また妹めは、あの通り十七の今日まで少しも世間の風に染まず、たゞ親思ひ兄思ひの一心に其日を働いて來た、あはれなもので御坐います、いかやうとも思召

次第、親子二人の體を萬事お願ひ致します、この貞吉は勢ひ餘儀なく今日この病院を出た以上、或は貴方の向うに廻ッて禮を失するかも知れませンが、もはや再び父にも妹にも遇はない覺悟を極めて居りますから、どうか岡田の妹と思はず、あゝいふ可哀さうな親子二人があること思召して、只管お願ひ申します」

握りし右の手首を放さぬ岡田貞吉に向ひ、川口省三また左の手首を握り返して、

「引受けた、確に引受けた、よく君、引受けさせてくれた、かうなれば、我も人も欺かず、ありのまゝ無遠慮にいふが、君の妹は僕の妻に受けても宜いかね」

「妻たるも、妾たるも、彼の運命です、到底、出來ない事を強ひて無理に殊更、お願ひ致しませンから、貴君こして出來得る範圍内で彼の一身上、何卒お見捨なく、愛してやッて下さい」

「君、僕は世面でいふ妾なるものを持たないよ愛これ即ち妻と思ッてる、もし萬一、正式に妻こして迎へられない以上は、決して他より娶らない、寧ろ我戀を世間の形式以外に成就したものとして、生涯その戀に滿足する」

「有難う御坐います、岡田貞吉、これで潔く心地よく何等の顧慮なく、勇み進ンで我目的に向ひます」

電話局に通ひし頃も、お雪これまで幾度か他に勸められながら、元來の内氣に生れたるのみか、あはれに育ちし自然の境遇上、世間に對して何事も臆病勝の目より見れば、束髪といふもの、あまり當世風に晴々しき心地して、學問でもせざる女に不似合とのみ思ひしが、恐ろしき力を含める戀の命令には一も二もなく、寧ろ今までの日本髪を口惜しがりて、

例のデパートメントストアより歸りし翌日、すぐに束髪、富める醜女は富の爲に作るほど益々その醜を增せど、天性の美人は貧苦の爲に作らざるも美人、作れば猶更ら新に其美を增して玉を磨ける如く、桃割のお雪こゝに束髪となれば、青味を帶びたる生際より次第に黑く膨らみて、ありあまる髮の毛の總々と艶々しき中央に、くッきりと冴え渡る顏の色、いき〳〵と浮び出でたる目鼻立、加之も色の褪めたる染絣の古袷を脫いで、新らしき肌襦袢にセル地の單衣、繼目のない晝夜帶も今日が始めての哀れさ、また我身に取りての嬉しさ、現代式の女としては殆ど世間普通の常着なれど、華奢全盛の人工飾を極めたるよりも猶更に輝きて、父の枕頭に坐しながら、

「ではね、お父さン、これから、まゐりますワ、過日お目にかゝッた時、わざ〳〵手紙を出したり人を遣ッたり仕ないが、兎も角お晝前の十一時までに銀座の四角、あの尾張町の交叉點へ來て居れと、さう仰しやッたのは、今日なンですからね」

父の久藏、横に寢ながら我娘を今更の如く見上げて、

「なるほど、女は髮容ごいふが、全くだね、お前、まるで見違ッたやうになッたぜ、よく今まで不足もいはず堪忍してくれたよ、ちよいと作れば、さうなるンだもの、可哀さうに長らくの間、それを構はずに捨てゝ置いたンだ、第一また近來は氣の故か、顏の色艶まで冴えて來た、これも皆あの方の、おかげだ、麁末に思ッては濟まないよ、今日お目にかゝれば、いよ〳〵何處へ勤めるといふ事が極まるンだらう」

「きッと、さうなンでせう、それで今日、來いと仰しやッたに違ひないと思ひますワ、また萬一、さうでなくッても、お父さン、お約束したンですから、なるべく早く、往ッた方が宜う御坐いますね」

「さうとも、此方から御催促の出來る事ぢやなし、それに限らず來いと仰しやれば、お前の方が早く出かけて、お待ち申すのが當然だ、もう彼是、十時を過ぎたらうぜ、もし先樣が待ッて在らしッちやァ申譯がない、早く往きな」

「ついでに、兄さンの事も、伺ッて見ませうね」

「いや、氣には掛るが彼奴の事は當分まァ、歸ッて來ないのを無事だと思ッてるから、自然お談話の出た時、伺ッて見るも宜いが、わざ〳〵お尋ねするには及ばない、それよりも第一お前の事を、差當り、お願ひ申すのが肝心だ」

「だッて、どうせ兄さンの事を、何とか仰しやいますよ、わたしが今日お世話になるのも、やはり兄さンが基ですもの」

「ぢやァ、どうでも其處は、その場の都合にするさ、今までと違ッて、お前が半日づゝの樂を勸めになり、また兄の奴が温順しくなれば、もう乃公は何の心配もない、それで安心だ、阿父は泣いて、喜ンで居りますと、さう申上げてくれよ」

七人の袋叩きに逢うて病院へ運ばれし兄の事も、上野の森影に誘はれデパートメントストアに出逢ひし我身の戀も、一切これを心の底に深く包みて、何とやら父を欺くやうに苦しけれど、顏色にも現はさず、そのまゝ我家の路地を立出でしお雪、

備前橋を渡る時、胸帶の間に忍ばせし小さき紙包みを解いて、人を恐るゝが如くに四邊を見廻しながら、そッと左の指に箝めし赤きルビーの光り、あの狹き小家に父の目を偸みて、戀に敎へられたる罪、どこの片隅に隱してありしやら、

待合はすには淋しきこころよりも却ッて人目に立たぬ混雜の場所、幸ひ築地との道も近し、銀座尾張町の交叉點へ午前の十一時までにといはれしお雪、

十時に我家を出で〻約束の時間に三十分も早く、往來ふ電車の十文字に暫し立停りながら、わざと乘降の人影に紛れて、そッと見廻せば、向ふの角に初夏の緣を垂れし柳の下、帽子の眉廂で深くして細きステッキを小脇に挿めるは川口省三、

待つ身と思ひの外、待たれし身のお雪、何とやら濟まぬ心の小走りに、急いで其まゝ道を横らンとすれば、折しも動き出せし電車と共に目早く認めし省三、おもはず片手を擧げて、聲は無けれど、あぶない、あぶない、

その電車の過ぎ去るや否、省三また輕く手招きして、そろ〳〵と横町の片側を歩み出し、裏通りの角に足を停め、近づきしお雪を滿面の微笑に迎へながら、

「たいさう早かッた事ね、うか〳〵すると今日は待ちぼけを食ふかと思ッて居た、しかし喰はされても怒らないよ、はゝゝゝ」

萬事の内氣に遠慮勝のお雪も、上野の森かけ以來、例のデパートメントストアに打解けられし以來、戀こいふものゝために心の早道を敬へられて、きのふ今日とも思へぬ親しけに小腰を屈めながら、

「大變に、お待たせ致しまして」

「なアに此方は外に、ちよいと銀座に用があッたから早かッたのさ、や、束髪だね、似合ッてるよ、いかにも束髪よく似合ッた、束髪に限る、どこの立派な、お孃さンと言ッても宜い」

お雪、おもはず顏を赤めて、さも恥づかしけに、されど嬉しけに、たゞ一言、

「あら」

「全くだよ、まづい女の束髪は何だか理窟ッぽくッて少々、御免を蒙りたいが、自然美を

失はずに全く似合ッてる、お世辭でない實際、さうして見ると日本髪よりも品位があッて高尚だ、これからは束髪に極めて仕舞ッた方が宜いね」、

「何だか、氣が咎めまして」

「そンな馬鹿な事があるもンか、はゝゝゝその容貌は美の對照上、たしかに束髪を要求してるンだよ、自分の氣が咎めるよりは人が蒼蠅く目を付けて困るだらう、はゝゝゝ時に今日はね、これから二三時間、自動車に乘ッて貰ひたいが、どうだね」

お雪、今更に額越の目を睜りしか、睜りし目は純日本式に水晶の如く冴え渡りし黑目勝、

「自動車、で御坐いますか」

「わざと今日はね、傭ッた借自動車だから何處で乘ッて、どこへ降りたッて少しも氣象はゝらない、實は一時間ほど前から待たしてあるンだ、つい近くに、まさか地獄へも連れて行かないよ、はゝゝゝ」

そのまゝ歩み出せば、嫌とも言はず從ひ行きて、數寄屋橋を渡りながら、

「どこで御坐います」

「自動車かね」

「いゝえ、行くところは」

「行く先はね、大森だよ、すぐだ、その大森で、晝飯を食べながら、談したい事がある、往復三時間で大丈夫、ちよいと市中を散歩したぐらゐで濟むよ、今日は餘儀なく黑字番號だが、今に乘心地の宜い白字番號で誰憚らず、ゆッくりと愉快なところへ出かけようね」

お雪、歩みながら談話の繼目を失うて、

「白字、黑字といふのは、どンな事で御坐います」

「はゝゝゝつまらないこッたがね、ちよいと知ッて置けば世間を歩いて面白い想像が浮ぶよ、氣を付けて御覽、自動車の後に番號の札があるだらう、その札が白くて數字を黑く墨で書いてあるのが一時間幾何といふ營業的の貸自動車だ、その札が黑くて數字を白く現はしてあるのが自分の所有だからね、いくら威張り返ッて全盛振を發揮して居ても、白札に黑い數字の番號ぢやア聊か、お氣の毒な感じがするよ、はゝゝゝ自動車は急用のためで人格とは別問題だが、一時の借物で傲然と往來を見下しながら駈け廻る人間の多いのは、いかにも見え透いた虛榮的で、淺ましい世の中だ、しかし今日は此方も淺ましい仲間入をして、大森行となッたよ、はゝゝゝ」

氏なくて玉の輿といふ諺を其まゝの現代式に、生れて始めて自動車へ乘せられしお雪、ふわりと夢に雲の上を行くが如き心地もすれど、をり〳〵また不意に跳ね上げられて思はず眉を顰め、憎からぬ人と並びし我顏を外より見らるゝ恥づかしさに、片隅へ身を縮めながら差俯けば、それを頻りに慰めむとする省三、吹き出せし莨の煙を俄の手先に搔き消して

「これはね、あまり上等でないタクシーだから、かう搖れるが、も少し乘心地の宜いもンだよ、さう隅の方へ寄らなくッても大丈夫、しかし嫌なら止さうかね、途中、何處で降りても構はない、氣持、わるくないかね」

「いゝえ」

「ぢやア堪忍するさ、大森、すぐだよ、そら、もう品川へ近づいて來た」

「早う御坐います事」

「なアに自分の持ッてるのは、こンなに飛び上らないで、まだ〳〵早いから、今に二人そ

れへ乘ッて誰に遠慮もなく、すきなところへ自由に面白く行かうね」

お雪の顏を見れば、わざと横を向いて、窓越に品川の沖を眺めながら、聞えぬ風情、

「あの、お臺場まで、どのくらゐ、御坐いませう」

「手を伸ばせば屆くやうに、つい其處の近くに見えるが案外、海といふものは遠いよ、遠く見えて近い人情とは、まるで正反對だ、やア品川の町へ這入ッた」

「品川の、町の中を通るのは始めて〻御坐います」

「さうだらう、親類か友達でもあればだが、わざ〳〵別に用のないところだからね、ちよい〳〵と兩側に嗟簾の掛ッてる家、あれが女郎家だよ、自分の不心得から落込ンだものもあるだらうが、つまり不幸な女が浮世の浪に漂うて餘儀なく打上げられた人生悲慘の極だ、考へて見ると人の運といふもの、わけて女は、いつ何時、どうなるか知れないね」

これまでの不運に育ちて、動もすれば沈み勝なるお雪の前、うッかりと語りし省三、慌て〻打消すが如くに言葉を續けながら、

「しかし總體の上から見ると、やはり男よりも女の方が宜いね、男の努力奮鬪したのと、女の自然に任した成行と、その結果は殆ど同じくらゐだ、外國でも貴族の令夫人と仰がれたり交際場裡の花と立てられたりする女に、その貴族から出たものは却ッて尠い、我國の日本なンかは猶更、さうで、一足飛びの出世は女に限る、女には力を盡さずして直ちに男を征服すべき美こいふものがあるからね、いくら理窟を揑ねても、最後の解決は古今東西、いづれも一致して美これ女の生命だ、醜い女は一生懸命に學問でもして、その醜さ加減を補ふより外に道がない、容貌の悪い女に教育のあるのは婦人の調和策で、

當然だよ、はゝゝゝ」

お雪に對する省三の苦心慘澹、一語一句の端にも深き注意を拂うて、戀より生ずる細心の用語は殆ど化學者の研究に等しく、また俄に言葉を轉じて、

「今日お晝に何が宜からう、どンなものが好物、座敷も料理も食器も揃ッてるところは市中にあるが、ゆッくり仕ないからね、や、もう大森の海岸へ來た」

大森の海岸、或料理屋の門口に自動車の停るや否、省三まづ降りて何となく今更に躊躇せるお雪の手を取り、靜に引出しながら、運轉手を振り返り、

「たいして暇は取らせないからね、どッか差支のない、その邊で待ッて居てくれ、一時間あまりで直ぐ歸る」

ポケットより紙幣を取出して、勝手に食事せよと命じながら、またお雪を見返り、



「こゝで晝飯を食べよう、なアに遠慮も何もないよ、お客をするのが商賣だ」

もはや歸れもせず、其まゝ立縮みても居れず、憎からぬ人なれど、うか〳〵と誘はれ來りて思へば我ながら大膽なりと、聊か眉を顰めしお雪の顏、加之も三四人の女中に慌たゞしく迎へられて、はッとせし胸の動悸に赤くなりしを、我身の影に藏ふが如き省三、わざと猶更ら言葉の調子を輕く、

「先刻、電話を掛けて置いた筈だ、見晴らしの宜い靜な座敷、あるかね、お前の家は料理が巧いといふ評判を聞いて來たンだ、お序でなく、わざ〳〵來たンだぞ、うンと御馳走してくれ、可哀さうに、朝飯も食はず遣ッて來たよ、お氣の毒だらう、はゝゝゝ」

馴れぬお雪のため、靴の紐を解きながら、入らざる愛敬を振り蒔いて、海に面せる奥の小座敷へ打通り、女中の手も待たず障子を引開け、わざと無雜作に寛いだる背を柱に持たせ、

さも心易げに胡座を掻きながら、

「さア、座布團を敷いて、も少し中央へ出てさ、何故、さう遠慮するの」

「これで結構で御坐います」

「結構な事があるもンか、女中なンかに見られても、さう固くなッてるのは却ッて變だよ、あまり强情に隅の方へばかり寄ッて居ると、無理にでも引ずり出すよ、はゝゝゝどりや抱いて出さうか」

わざと胡座を立直せば、おもはず驚いて中央へ擦り寄り、膝を掻き合せながら、ほッと息を吐きし風情、省三のためには露を含める名花一輪の搖ぐが如し、

「いよ〳〵計略に掛ッたね、はゝゝゝ」

「まア、お人の悪い事」

「よほど人が悪くならないと、其お客さま、なか〳〵急に動きさうもないからね、しかし骨の折れるこッた、いつになれば、世話の燒けないやうになるだらう、困ッたねエ、はゝゝゝ」

いち〳〵笑ひ聲を添へて、莨の煙を吹きながらの獨言、

「お傳が大變だ」

お雪も自然に氣を引立てられ、いつしか我を忘れて呵しく、

「ほゝゝゝ」

下戸だよといふ言葉に萬事を心得て、運び出せし料理の數々、省三は女中に向ひながら、

「お給仕は入らない、ゆる〳〵勝手に遣るからね。酒の代りにサイダーかシトロンぐらゐあッても宜からう、御馳走これきりか、お前の家で出來るだけ澤山、どし〳〵構はず持

ッて來い」

女中の立去る後姿を見送りて、

「さァお食べ、いやなものは其まゝにして、すきなものだけ遠慮なくね、兎も角お晝飯を濟ましてから實は少々、話したい事がある」

あらむかぎりの料理を取寄せて、二品か三品の外、あとは箸も著けず、其まゝ悉く下げさせし贅澤さ、

いかにも心得貌に女中の立去りし後、省三は笑ひながらお雪に向ひ、

「いろ〳〵と隨分、數は多かッたが、やはり大森は市中から來て海を見晴らすこいふのが御馳走で、食べるものは尠いよ、しかし、これでまづ晝飯は濟んだ、あの中で、何が一番、氣に入ッたね」

「皆、結構で御坐います」

「また結構が始まッた、何を言ッても、いち〳〵結構の一點張で押通すンだね、はゝゝは」

「だッて、全く、さうで御坐いますもの」

「ぢやァ結構として置いて、お父さンの手前、あまり遲くなるのも、よくなからうから、手ッ取り早く、うちあけて、つまり無遠慮に、露骨に話すがね、これは冗談でなく、無論また一時の戯れでもない、實際この川口省三が心に思ッてる事を少しも殘さず、ありのまゝ正直に割ッて話すンだから、その決心で聞いて貰ひたい」

何とやら改まりし言葉の端に、お雪は思はず居坐を直しながら、差俯いて膝の上に重ねし我手を見詰め、じッと其まゝの無言、

「實はね、かういふ事を今、こンなところで、だしぬけに話すのはあまり、輕率のやうでもあり、第一また、をかしく變に取られても困るが、さしあたり外に行き場所もないから、仕方なしに餘儀なくね」

省三は續けざまに莨を吸ひ出して、互の顏を殆ど煙に隔てながら、

「つまり習慣上、形式的に、仲間へ人を入れて話すか、入れないかといふだけの相違で直接も間接も結局、同じこッた、やはり雙方とも本人の意志にあるンだからね、西洋なンかでは、かういふ事が當然になッて居ろ、まづ互の諒解を得るまでの間は、友達のやうに親しく交際をしてね、いよ〳〵雙方に遺憾なく、心と心の結び合ッた上、あらためて親や兄弟の同意を受けるンだが、その親や兄弟も亦これに對して餘計な干渉はしない事になッて居るから、いはゆる一時の仲人口に乗せられたり、外の事情で父兄のために壓迫されたりして、本人の意志に反いた不滿足の結婚は尠い、つまり戀といふものに無理を加へず、戀は戀以外の他人に左右さるべきものでないとして、自然に春の花の咲くが如く、無事に戀が遂げられ素直に戀が成就するから、男女ともに愛を傷つけられ、愛を害はれる事が尠い、また日本にも古くより戀に上下の隔てなしといふ諺があッて、戀には貧富の差別なく、身分の相違がないものとしてある、釣り合はぬを不緣の基といふものは、本人の意志が弱いため、他から入らざる指圖を受けて戀の根柢を覆された結果、强制的に引分けられるンだ、互の覺悟次第で、いかなる場合、いかなる事があッても、きッと戀は遂げられるものに極ッてる、と考へるが、どうだらうね」

無遠慮に露骨に打明けて、萬事を手ッ取早くといへど、實は案外、回り遠く、うか〳〵と入らざる議論めいて、加之も議論の納め場所を失ひし省三、お雪は猶更ら滿面を赤く染め

出して身動きも得せず、暫し互の無言ながら、沈默の雄辯は戀の力、その無言中に却ッて心と心の固き約束、

上野の森影に誘はれて、一袋の鹽煎餅を取合ひし時、電話局の交換手といふ增遇は餘儀なく一轉し、例のデパートメントストアに出逢うて、休憩所の窓際に打解け食堂の箸を取りし時、もはや戀の芽は吹き出して、今日この大森の海岸へ自動車に運ばれ、料理屋の奥まりたる一室に差對ひし時、互の無言中に心と心の固き約束は結ばれ、其まゝ夢うつゝの如くに歸り來りし省三お雪、

わざと自動車を新橋のステーションに著けさせ、待合室にも入らず、また出入の繁き人混に紛れ、ぶら〳〵と目立たぬ中を伴ひ、いかにも用談ありげに歩みながら、

「外國は犯罪まで進んでるから日本と違ッて、寧ろ淋しい場處よりは繁華なところで多く行はれる、現に恐ろしい殺人犯なンかも證據の殘り易い市外よりは、却ッて譯の分らない群集雜踏の中で、最も短い最も鋭利な刄物を急所へ刺したまゝ人混に紛れ込むさうだ、それを考へると少々、なさけないね、我々も罪を犯さないが、いつも目に立たないやう世間を憚ッて、こンな人の大勢、ざは〳〵としたところばかり選ばねばならない、まア當分は或時期まで、仕方もないが、早く淋しい靜なところへ氣象なく、自由に歩きたいねエ」

お雪も何處となく今までとは變りて、さのみ放れもせず歩みながら、

「もう、何時間になりませう」

「さア、出たのが十一時、ちいさ前で今、三時過だから、ざッと四時間だよ、四時間ぐらゐ、別に差支なからう」

「かまひませんが、歸ッて今日どう申したら、宜う御坐いませう」
「お父さンに、何と言ッて出たね」
「今までの電話局を止めましたから、ごッか、外の樂なところへ、お世話して戴くやうに」
「ぢやア、かういうて置くンだね、外へ世話する心算で、連れて行かれたが生憎、先方の主人が昨日、急に旅行したとね、すまないが暫くの間、一時の方便だ、そのうちに自然ご段々、お父さンの得心するやう、おだやかな工夫するからね、決して悪く考へたり欺す意味ではないが、互の境遇上、現在の場合、已むを得ないことは、いふもンの、やはり多少の罪を犯してる、それだけに猶更、孝行をしなければ、いけないよ」
「はい」

「此方も、その考へで、きッと他日、それだけの事をする覺悟だ、今日も何か、おみやけを持たしてやりたいが、わざと控へて、止さうね」
「あのウ、さういふ譯では御坐いませンが、幸ひ戴いてある、お菓子の切手を一枚、持ッて出ましたから、少々ばかり、買ッて歸りませう」
「や、さうか、まだ殘ッてるンだね、兎も角それを今日、持ッて出たのは感心だ、少々ばかりでなく、うンと皆、買ッて行くが宜い、また兄さンの事を聞かれたら、先刻、歸りに自動車の中で言ッた通り、わかッてるだらう、ぢやアこれで今日はね」
人混に紛れながら、省三、そッと手を握れば、お雪また握り返して、互の目と目に無量の言葉、

晝も半ば閉めたる入口の戸の外に足の停まりしは、お雪の歸りしかと父の久藏、枕を欹て見れば、そッと顏を差込みし兄の貞吉、

「やァ貞吉か」

聊か伏目勝に入りて、枕頭に坐しながら、

「過日から一度、歸らう、歸らうと思ッて居ましたが、引續いて急に忙がしい仕事が立込みましてね、つい今日まで氣に懸りながら、相すみませンが、どうですね、身體の工合は」

「なァに仕事の忙がしいのは結構だ、わざ〳〵忙がしい中を無理に歸ッて來るには及ばない、お前が今までと違ッて、さうなりやァ乃公も安心だよ、おひ〳〵時候も暖くなッて來るから身體の工合も段々、ごッちかといへば、まァ宜い方だ」

さうですかと振上げし我子の顏を見れば、額の毛際より斜めに一寸あまり、百足蟲の這ふが如くに赤黑の皮肉の寄れる疵痕、父は思はず老の目を睜りて、

「貞吉、そ其、その額は、どうしたンだ」

わざと靜に首肯いて、何氣なく片手に押へながら、

「これですか、どンでもない、つまらない、馬鹿な目に逢ひましたよ、實は十日ほど前、友達が五六人、醉ッぱらッた喧嘩の仲裁に這入りましてね、その時、誰が抛げたか、どさくさ紛れに空のビール瓶が飛ンで來て、運惡く、中ッたンですよ、此方は生來の下戸だから飲まないが、職工なンかで飲む奴になると、をり〳〵、こンな飛ッ沫が來て困りますよ、しかし大した事はありません、すッかり、もう癒ッて仕舞ッて、この通りです」

殊更に額の疵痕を音高く平手に叩きながら、

「これが喧嘩の本人で受けたとすりやア、全く親に對して、申譯のないこッてすが、あさで文句の持ッて行き場もなし、まア時の災難と諦めてね、はゝゝゝうッかり機械に挿れて指一本、なくしたよりは優でせうよ」

「や、さうかい、それぢやア仕方もないが、平生お前の氣性として大勢の寄ッたところは、よくないよ、いくら友達でも何でも、なるべく喧嘩の場なンかへ立入らないに限る、もし急所でゞもあれば、それこそ大變だ、おとなしく仕てくれよ、男の子は一人だ」

「へい、有難う御坐います、これからア氣を付けますよ」

「可哀さうに、お雪も、そればかり心配してるぜ」

「すみませン、時に今日、どこかへ行きましたね、ちよいと聞きましたが此ごろ、電話局の方を止めたさうで」

「さア、それに付て、重ね重ね、お禮の申しやうもない事でね、お前、それを知ッてゐる上、定めて、あの方から萬事、聞いたらうな」

熱湯を呑むが如き貞吉、いかにも心は苦しけれど、こゝぞと顏色にも出さず言葉も輕く、

「自分の妹ですからね、この兄の口で、さう厚かましくも出られませンが、實は三日前に始めて、かういふ工合に世話してやると聞きました時、何分、よろしくと賴ンで置きましたよ、さうなりやア妹も少しは、今までよりも氣が引立ッて、また身體も樂になッて、自然お父さンの心配も減るでせう、他人の、おかけで現在、自分の親や妹を世話して貰ッたり、た助けて貰ッたりするのは、いかにも申譯のない、意氣地のないこッてすが、暫くの間、さうして居て下さい、今に貞吉も、おわび旁、なゝ何とかなりますよ、社長は少々、頑固で、をり〳〵分らないところもありますがね、あの子息の省三といふ人は、

若いに似合はず、なか〳〵行屆いた、情の深い人です、最初の間は、さうも思ッて居ませンでしたが段々、いろンな事で近づいて見て、なるほど、これならばと安心して、萬事の世話になれる人ですからなァ」

病院を出で〻四日目、額の繃帶を取りて二日目、また今日より不孝を重ねて暫く父に逢はざる覺悟の貞吉、今か今かと妹の歸りを心待に待ちながら、

「實はね、お父さン、かういふ事になッてるンですよ、一時、祕しましたが先月、あの新聞に出た通り、同盟罷工の發頭人は全く、この貞吉で、社長へ對しても會社へ對しても隨分、手嚴しく皮肉に頑强に反抗した事は仕ましたもンの偖、働かねば食へないといふ其日暮しの職工ばかりですからな、やはり長いものに卷かれて追々と皆、泣寢入のまま降參して仕舞ッた後へ、殘ッたのが八人で、いよ〳〵打漏らされた殘黨八人となれば、つまり螳螂の斧だ、いくら騷いでも威張ッても到底、齒が立ちませンよ、のみならず結局、會社の方は他への見せしめで、此方は遣り損ッた曉、おめ〳〵また使ッて下さいともいへず、打明けたところ五六日前、八人とも首になッて仕舞ひました、先刻、仕事が忙しくッて歸れなかッたと、いひましたのも實は、かういふ理由で、相濟みませンが、その後始末に、ごた〳〵して居ましたから」

父の久藏、思はず寢床より老の膝を乘り出して、

「それ見ろ、いはないこッちやァない、だから物事は總て控へ目に、おとなしく仕ろと歸ッて來る毎に口を酸ッぱくして、あれほど喧ましく、言ッたに」

「や、何とも今更ら、申譯が御坐いませン、しかし、しかしね、しかし其處です、お父さン、そこに例の省三さいふ、わかッた人があッて、たゞ見捨て〻置かない、加之も人體、

あの人は親の社長と違ッて、表向は兎も角、或點までは寧ろ我々と反對でないンですから、内々そッと八人に對し、まづ半歳ぐらゐ、じッと仕て居ても食へるだけの金を呉れました上、別にね、お父さン、ごう考へたか、この貞吉へは、親や妹の事を心配するな、乃公が引受けたと、かう、いはれたンですが」

差俯きながら額越に父の顔を見れば、痩せたる頰を傳ひし兩眼の涙、其まゝ拭ひもせず、

「貞吉、それで貴樣ア濟むと思ッてるか、人樣の有難い事も、勿體ない事も、程度のあるもンだぞ、いくら何と仰しやッたに仕ろ、づう〳〵しく、さうなッた揚句、そンな事が貴樣お願ひ申せるか、申せないか、よく思案して見ろ、お世話下さるのを宜い事にして自分の親、妹を賴ンで置いて、貴樣ア全體、どうするンだ、やれ〳〵と肩の荷でも卸した心算で居るンぢやアないか、それなら今こゝで、さうこ男らしく、はッきり言ッて仕舞へ、乃公は乃公で、また覺悟がある」

今に始めぬ事ながら、昔氣質の一徹に責められて、ます〳〵苦しげの貞吉、

「お父さン、こりやア何處までも、いふまいと思ッて居ましたがもう仕方がない、かうなれば萬事、打明けて、いひます」

「親に打明けるの打明けないのと、それが第一に間違ッてる、さういふ量見だから、かうなるンだ」

「いや、惡う御坐います、惡う御坐いますが、あの省三といふ人、お父さンや妹を引受けてくれるには、くれる理由があるンです、お父さン、氣を靜めて聞いて下さいよ」

病める父の前に差俯きし貞吉、ます〳〵苦しき心の底より一語一句、絞り出すが如く、

「お父さン、實は今いふ通りの始末で、會社の方は首になッて仕舞ひましたが、幸ひ、わ

けの分ッた、あの省三といふ人があッて、その日から直ぐ狼狽へないやう、當分まア食ふだけの金を貰ッたのは八人とも同じですが、中で一人、この貞吉に對して、親の事も妹の事も心配するな引受けた、あくまで世話してやらうといふのは、お父さん、何故でせう、ぞう考へます」

「ぞうッて、勿體ない、それを今更ら、何故でせうといふ奴があるかい、貴樣が會社に向ッて、あンな事を遣り出した時でさへ、わざ〳〵此見苦しい裏長屋へ尋ねて來て下すッた上、いろ〳〵と御親切に仰しやるほどの方ぢやアないか、この通り乃公は長の病氣で、お雪も現在あの通り苦勞してる中で、貴樣が首になッて仕舞ッたから、可哀さうだと思召して、さう仰しやるンだ、お若いに似合はず、お慈悲深く行屆いて、全く珍らしい御人體に出來て居らッしやるよ」

「なるほどね、あの人も當世風の若いに似合ず、珍らしい出來物だが、お父さんも亦、生れながらの佛さまだ、もし相手が惡けりやア、それこそ大變、ミンでもない事になる、たッた一人の妹を鬼の餌食にするところだッた」

「貞吉、何といふンだ、相手が惡けりやア鬼の餌食、それりやア貴樣、ぞういふ理由で、そンな事をいふ」

「お父さン、こゝを噛分けて、よく聞いて下さいよ、實はね、ぞうなるに仕ろ自然の成行に任して、この兄の口からは一言も出すまいと思ッて居ましたが、かうなれば萬事、露骨に打割ッて兎も角、お父さンの耳に入れて置ます、いかにも省三といふ人、始めは只會社のため自分の親のため、同盟罷工を企てた發頭人の家族は全體、どンな境遇かと實地それを見に來たンですが、その後あの人の段々と親切を深くして來たのは、この貞吉

よりも寧ろ、お父さン、お雪に對しての方が多いンですぜ、考へて御覽なさい、どれほど我々に同情する點があッても、いくら我々と一致する點があッても、元來の立場が違ッてる、境遇が違ッて居ますよ、まして一旦、首にして仕舞ッた奴、内々で半歳分の食料を遣れば慘酷でないといふ人情の上に於て、もう澤山だ、それだけでも世間普通よりは出來てる方だ、ところを其中の一人、この貞吉に向ひ、心配するな親も妹も引受けたと自分から進ンで來るのは、外ぢやアない、お父さン、お雪を、くれないかと、いふ意味ですよ、もし先月の初旬ごろ、こンな事を聞けば、例の百圓紙幣を叩返した貞吉です、物も言はず、だしぬけに横ッ面の一撃ぐらゐ、キツと食はしたに極ッてますが、此ごろ考へるこ、ありやア間違ッて居ました、自分の心に思ッてる事は現在の今も同じで、決して間違ッて居ませンが、味噌も糞も一緒に相手の人間を見る目が間違ッて居ましたよ

おまけに浮世といふ敵のため、殘念ながら組み伏せられてる兄の奴が、たゞ自己一人の胸から割出して、どういふ幸福な運命を持ッてるか知れない妹の身上まで彼是、指圖する力も何もありませンよ、お父さン、あらためて貞吉がお願ひします、どうせ、どッかへ遣る妹とすれば、今すぐといふぢやアないでせうが、お雪を、あの人に、遣ッて下さいませンか、無論、世間に對して身分の違ッてる事も、また貧富の相違も其他の萬事一切、承知の上で、いかなる支障があッても、どンな面倒があッても、覺悟の上で、貰ひたいンでせうからね、まさか生涯の日蔭ものには仕ますまいよ、お父さンにも明さずに濟まないこッてすが、實は固く、この貞吉まづ手を握ッて、約束して仕舞ッたンです、聞かなくッても、お雪に異存は、なからうと信じて居ります」

始めは父に向うて妹の事、をり〳〵それとなく言葉の端に現はしながら、敵に覘はるゝが

如く氣遣ひ！貞吉、今は却ッて省三のため戀の味方となりて、あれほどの執心、あれほどの人、まさか生涯の日蔭ものに捨置くまじといふ、其お雪は折しも歸り來りて、おもはず兄の聲に足を停め、そッと門口に立聞けば、我身の事、加之も現在、今日は大森まで自動車に運ばれて、心と心の固き約束を結び、新橋のステーションまで歸りて、その別れ際の混雜に人知れず手と手を握り合ひしお雪、よその他人に噂せらるゝよりも恥づかしく、顏を赤めて胸は轟ろきながら、父の返答、いかにと耳を欹つれば、其まゝの無言に兄は猶更ら言葉を續けて、

「お父さん、また生意氣な奴だと叱られるかも知れませんが、おひ〳〵世の中の舞臺が變ッて、時代の要求に產み出される總ての人事一切が違ッて來ましたからね、昔のやうに貧乏だから金持に遠慮するの、いや身分の相違があるのといふ、そんな不自然に人道を沒却した古い習慣は、もう既に無くなッて仕舞ッて、つまり萬事が人間本位になッたンですから、お雪の事だッて、この裏長屋に住ンで其日を食ふに困ッてるのは、決して妹の身分でも何でもありませンよ、こりやア貧乏といふ境遇だけのこッてす、まして女の運命は階級制度の嚴しい昔でさへ、いつ何時、どう出世するか知れないもンだ、それを萬事、今の境遇から割出して、時代後れの馬鹿正直に入らざる遠慮を仕てやるのは、あまり自分の娘を粗末に卑下し過ぎた事で、可哀さうですよ、加之も幸ひ、相手は黃金萬能力で戀も愛も一時の玩弄物にするといふ奴でなく、所謂まだ色魔の類でもなく、案外に物事の分ッた人間で、あの金を取ッて仕舞ッて一文なしの丸裸にしても立派な男です、實はね、お父さん、御承知の通り始めの間は、いかにも小癪に觸ッた野郎だと思ッて居ましたが、今ぢやア第一この貞吉が惚れ込みました」

父の久藏、なほ無言のまゝなれど、貞吉は最後に力を極めて、聊か聲を曇らせながら、

「だ、大丈夫です、お父さン、この貞吉、自分の都合を考へたり自分の荷を輕くするために、たッた一人の妹を、性根も知れない奴の慰み物には仕ません、全く、相手の人間を見屆けたからですよ、第一お雪に心ばかりの孝行でなく、思ッた事は思ッた通り行へる樣に實際の孝行を充分、さしてやりたいからです、ありやアお父さン、親のためだと因果を含めたら賤しい家業に身を賣られても、泣きながら承知する女に出來て居ますぜ、親も兄も其の日暮しの貧乏こそすれ、心が腐ッて居なかッたので、やッと繫ぎ止めたが、うか〳〵すりやア、あぶない容色を持ッて生れましたよ、それを幸ひ運命の神樣が救ッてくれたのだ、お雪としても亦、決して、嫌な人ではない筈です」

お雪、そッと門口より手を合して兄を伏拜み、何と思ひしか其まゝ路地を外へ、足音を忍ばせながら、追はるゝ如くに出でしが、まだ風にも冷めぬ赤き顏、

平常さへ出入に蒼繩き路地の兩側、まして此ごろは電話局へ朝夕の勤務なき身を怪まれ、きのふ始めての束髮に目を欺てられ、新らしき著物と帶に聲を潛めて私語かれ、大森よりの今日は猶更ら心に咎めて恥づかしく、暫し內へも歸れず外へも立たれぬお雪、

近處の人目を小走りに遁れて、備前橋まで夢うつゝの如くに來りしが、小田原町を出るに入るにも外に道なく、この備前橋は兄を待つべき關所、四邊を見廻しながら、行きつ戻りつ幾度か、

凡そ一時間あまりの後、橋の此方より見れば、ちらと河岸向うに兄の姿、お雪は今更に慌てゝ七八間も後へ立戻り、わざと何氣なく歩み出せしが、差俯いて兩腕を組みながら近づきし兄は氣も付かず、

「兄さン」

不意に呼ばれて、おもはず顔を振り上げし貞吉、

「や、今か、も少し早く、歸ッて來りやァ宜かッたに」

お雪は何よりも第一まづ兄の額を見上けて、我身の事も打忘れ、

「まァ兄さン、ひどい疵痕になりました事ねエ」

「なァに、繃帶を取ッたばかりだからね、かう目に立つンだよ」

「ごうも、ないンですか」

「もう何ともないよ、たゞ當分の間この通り、ちよいと痕が殘ッてるだけだ」

「段々、その痕が薄くでも、なるンでせうか」

「薄くてく濃くても仕方がない、そンな事ァ兎も角、今日、久しぶりで阿父に逢ッてね、友達の喧嘩を仲裁した拍子に受けた災難だと、ごまかして仕舞ッたよ、その外、お前の事を充分、それとなく、得心するやうに、いろ〳〵こ話して置いたからね、萬事その心算で居るが宜い、その代り賴むぜ、過日、病院へ來た時、くれ〴〵も言ッた通り、兄こして全く、すまないが、これからァ乃公の分も一緒に孝行してくれよ、あの人にさへ付いて居りやァ、お前も女としての不足はなし、こンな兄が三人や五人の働くよりも、ずッと樂な孝行が出來るンだ」

お雪は顔を得あげず、たゞ我脚下を見詰しま〳〵無言、兄の貞吉いかにも苦しけの滿面を皺めながら、

「お前はね、うき世こいふもの〻ため、どうなるか知れないところを幸ひ、人生の悲慘を免れて、好い人に救はれるンだ、この兄はね、持ッて生れた氣性で、その日を樂に食ふ

だけぢやァ生きて居れない、社會のため主義のため、どうなるか知れない運命に向ッて一番、遣れるだけのことを遣ッて見たいンだ、いよ〳〵お前が阿父を背負ッてくれたとなりやァ、この岡田貞吉、どンな奴にも恐れず何物にも躊躇せず、思ふ存分に跳ねて見る、わるく言へば猛獸を野に放てる如した、丸裸一貫の赤手空拳で澤山だ」

お雪は思はず兄の手首を握りて、

「兄さン、どこへ往ッても、どうなッても、居處だけは、わたしに知らして置いて下さいよ」

「よし、よし」

「きッとですよ」

「わかッた、乃公も、阿父の事、をり〳〵聞きたいよ」

わざと早足に氣強く別れし貞吉、されど流石に何こやら窘らしき心地、五六間も行過ぎし後、おもはず振返れば、お雪はまだ動きもせず、そこに其まゝ作られたるが如くに立ちて、じッと此方を打守る哀れさ、これを捨てゝも行かれず、手招きすれば、さも嬉しけに走せ來りて、見上げし目に一ぱいの涙、

「兄さン、これからは兄さン、どうなさるンです」

兄の聲は自然に曇りて、

「別に、どうッて、かうなるといふ今こゝで前途の事は、はッきり、分らないがね、遣らうと思ッてる事は、あくまで、あらゆる萬難を排しても遣り遂ける決心だ、それに付いて兄が妹へ逆倒の頼みだが、あの阿父さへ、お前の身に引受てくれりやァ、これ以上の有難い事はないンだよ」

「それは、わたし、どう仕てゞも、きッと出來るだけの孝行を盡しますが、お父さンは、やはり兄さンの事を絶えず、心配して居ますからね」

「だから、お前に頼むンだよ、そこを巧くね、なるべく心配させないやうに巧く調子を取ッてね、つまり一年か二年、遠いところへでも、出稼ぎに往ッた氣で、當分この乃公の事を忘れさしてくれ」

「だッて、そりや兄さン、無理ですよ、親子ですもの」

「さういへば、一言もないがね、ぢやァ暫らくの間、ごッかで、苦學してるとでも、思はしてくれ、苦學中は、歸らないものとしてね、實際また今までと違ッて、たゞ吼えたり跳ねたりするばかりぢやァない、これからア目的に向ッて活動の傍、暇さへあれば脇目も觸らず、一生懸命に本を讀む考へで居るンだ、お前に阿父を任して置いて、ぶら〳〵片時も遊ンで居れるかね、今後の岡田貞吉は、いふ事も、する事も、たしかに根柢のあるところから著々、一歩一歩に足跡を印けて踏み出す覺悟だ、半分は苦學生になるンだよ」

「では、さうとしてね兄さン、もう何も、いひませンから、身體だけは、大切にして下さいよ」

「無論だ、金があるぢやァなし地位があるぢやァなし、この身體たゞ一個の健康を武器としての戰ひだ、お前も亦、よけいな事で氣を揉ンだり泣いたりせずに、達者に居てくれよ、煩ッてくれるな、いつまで言ッても同じこッた、これで別れよう」

差俯ける妹の横顔に傳ひし涙、見るに忍びず思ひ切ッて振り向きながら、遁け出すが如くに馳け出せし貞吉、その後姿を見送るお雪、

父に泣き妹に泣いて、その日の夕暮れ近く、流石の男も今日は何となう打沈みながら、歸り來りしは會社を馘られし以來、同志七人と新たに借入れし目黑の住居、門口より差覗けば、六疊二室の平家に電燈の光り薄く、たゞ一人の淋しげに寢轉びし爰

「おい皆、どうした」

「や、岡田、今かね、皆ア湯に往ッて仕舞ッて、僕が留守番を仰せ付かッたンだよ」

「わざ〳〵大した用ぢやアなし、湯に入るなら半分づゝ殘れば宜い、談話相手が出來るに

さ、どこまでも繫がッて歩く奴等だ」

「なアに金魚の糞のやうに繫がッて歩く譯でもないが、つまり七人ぢやア工合が惡いから

な、都合よく六人で出かけて、お互に背中を流し合はうといふ寸法だよ」

「なるほど、さうかい、ところで一人、半端な奴が居殘ッたンだな」

「この居殘されは君の歸るのを待ッて、打止に出る心算だ」

「お生憎さまだ、乃公は今日、湯に入りたくない」

「なくッてもさ、そこは友達の義理で」

「すまないが今日だけ、湯に這入るぐらるの義理は許してくれ」

「ぢやア此方から友達甲斐を見せろが、時に冗談は置いて飯は君まだかね、まだなら茶漬、

うンとあるぜ」

「いや、まだゞが飯も食ひたくない」

「どしたンだい、人一倍、食ふくせに」

「いかな大飯喰ひも、今日は何だか胸に支へて、全く、ほしくないンだよ、食ッて生きて

る人間が病氣でもない時に、をり〳〵こンな事のあるのは、いけないな、豚ぢやないが石瓦を除けた外、何でも構はず、むしや〳〵食ふ勢ひなくッては無效だ、人間といふ奴、どうしても氣分に支配せられるよ」

「いつもと違ッて、妙に何だか、をかしく悄氣てるぜ、調子が變たぜ、全體、どンな嫌な氣分に支配されてゐンだ」

「實はね、今日、久しぶりで阿父に逢ッて歸る途中、また妹に出逢ッて、さンざ泣かされて來たンだよ、いくら强情張ッて居ても、やはり弱いもンだ、血を分けた親や同胞の人情責には叶はない、口へ出せる事は兎も角、いふに、いはれないところは堪忍が仕きれないよ、泣いて心で、あやまるより外に仕方がないからなア」

「そりやア、とンだ氣の毒な目に逢ッて來たンだな、第一また外の奴と違ッて君が、さうなるのは、よく〳〵のこッた、お察しするよ」

「しかし考へて見りやア自分の愚痴で、少しも世間の知らないこッた、いくら泣いても、その涙は世間の勘定に入れてくれないよ、つまり人よりも苦し味の多いだけで、加之も誰に限らず人生此苦し味を免れないものとすれば、普通一貫目を背負ッて行くか二貫目を背負ッて行くかの相違だ、その段は安心してくれ、この岡田貞吉、生命さへありやア鐵でも火でも背負ッて行く覺悟だからね、例の事は大丈夫、そンな事のため毛筋ほどの弛みもない、親や同胞に泣いたゞけ猶更ら、ます〳〵目的に向ッて緊張したよ、いはゞ今日の涙を今日の社會、どンな奴に拭はしてやらうかと思ッてるくらゐだ、べそ〳〵女の泣ッ面は一時の感情的で、殆ど習慣性を帶びてるが、男泣きの一滴には血が混ッてる勿體ない、黄梅の雨垂と違ッて、さう無意味に乾かせるもンか」

時に利あらずして一旦の戰ひは敗れたれど、再擧を謀る足溜りとして、大崎を去りし後、新たに移りし目黑の借屋住居、

幸ひ川口省三の情に當分の籠城は窮せず、共同自炊の朝飯にも並の味噌汁を添へて、食はざるべからずといふ一日を一日の生活戰とすれば、まづ兎も角も今日の凱歌を擧げたる心地、

選べる都下の三新聞に頭を集めしが、岡田貞吉のみは兩腕を組んで壁に背を持たせ、大胡坐のまゝ頻りに何をか思案の顏色、暫く閉ぢし眼を開きがなら、

「おい皆、新聞は後にして、ちよいと頭を擧げてくれ」

池の砌に手を叩かれし龜の子の如く、七人いづれも打揃うて首を擡げ、岡田の顏を見れば、

いかにも緊張せる中に一種の柔かき微笑を浮べ、

「外でもないがね、僕は前夜、まんじりとも寢ずに考へた事があるから、それを今、君等に相談して見ようと思ッてるンだ、相談だぜ、いけなければ遠慮なく、いけないと言ッて貰ひたい、腑に落ちないところは、あくまで議論的に研究しよう、つまり我々が今後の方針を第一として、ごういふ工合に進んで行けば、遺憾なき最善の努力になるだらうかといふ相談だよ、結局は、及ぶかぎり無駄な徒勞を省いて、馬鹿な眞似をせずに目的を達し得らるゝかといふ相談だよ、蒼蠅からうが暫くの間、この貞吉一人に饒舌らしてくれ、お互に齒を剝合ッちやア喧しいばかりで肝心の要領を得ないから、僕が饒舌るだけ饒舌ッた後で、善いか惡いか、いち〳〵君等の批評を乞はう、辯士まづ咽喉を濕ほしてね、はゝゝゝおい君、君は手近に居る災難だ、その番茶を一杯、汲んでくれよ」

朝飯の呑み餘り、なまぬるい番茶を仰いで一息に注ぎ込むが加く、

「うまい、物價騰貴の今日、一斤二十錢といふ微塵混りの番茶、加之も朝飯に殘ッた出がらしを飲ンで、甘露の如く舌鼓を打つ境遇から、世界的の大勢に乘じて資本家の目のくり玉をデンぐり返してやらうといふンだから、考へて見ると愉快だぜ、或意味に於ては今日の社會中、我々が最も面白い地位に置かれて最も意義ある前途多大の仕事を與へられてるンだもし宗教家なら神に感謝するところだ、現在この一蓮托生の借屋住居から割出しても、下屋建の六疊二室に八人といへば、一人分が一疊半づゝで、十三圓の家賃を頭割にすりやア一圓六十二錢五厘だ、はゝゝゝしかし一疊半の破疊に陣取ッて一圓六十三錢五厘に一個月の雨露を凌ぐ人間が、堂々たる鐵骨石皮の會社に向ひ巍々たる大厦高樓の富豪を相手として、寧ろ彼等に便利の多い習慣や法律の下で戰ひを開くンだからね、迚も尋常一般の覺悟ぢやア無效だ、うか〳〵すれば生肝が乾上るぐらゐの惡戰苦鬪を續けねば到底、勝目はないよ、その證據には近ごろ諸方に頻々と起ッた同盟罷業の結果は、どうだい、一時の流行か何かのやうに只、わい〳〵と騷ぐばかりで、少しも地盤の固まッた根柢の深いものはない、中には多少の獲た事もあるだらうが、その獲得物の至極お粗末にして輕少なる點は、まるで泣く兒の飴を舐らされたと一般ださらに、資本家と勞働者の問題に觸れて居ない、つまり眼前の少利に眩惑して加之も戰ひの法を知らないからだ、お人よしが揃ッて欺され易く、頗る遣り方が下手だと見るが、君等ア全體、どう考へる」

かく口を開き始めし岡田貞吉、大胡坐を組直して顏面に一種異樣の凄味を帶び、

「君等の考へは後で聞くとして、前夜から寢なかッた僕の考へを兎も角も話さう」

ます〳〵緊張せる顏面、聊か亢奮の色を帶びて七人に向ひ、おもはず大胡坐のまゝ橇の如くに乘出しながら、

「今いふ通り、どう考へても、どう最眉目に見ても、近來の頻々と起ッた同盟罷工は下手だよ、あまり遣り方が拙く出來過ぎてるよ、十中の八九、わづかに一時の餌を舐ぶらされて其まゝの泣寢入になる筈だ、わけて最も見苦しいのは、隣りの町内で騷いだから此方も負けずに騷ぐといふ調子で、わい〳〵お祭り騷ぎの夢中になッて熱狂した結果、後始末の付かないため仲間喧嘩の滑稽を演ずるに至ッては、いやはや、なッてないよ、いくら飛でも跳ねても徹底しないのが當然で、相手の資本家は急かず慌てず悠々と高を括ッて、いはゆる自繩自縛の喜劇を見物してるンだ、好い面の皮ぢやアないか、はゝゝゝ第一、かういふ連中が多くなれば多くなるだけ、猶更ら敵に乘ぜられ味方の不利益を增すのみで、實際の勞働問題を眞面目に考へて飽くまで叫ばンとするものゝため、ごのくらゐ權威を損じたか、どのくらゐ前途の障害を來したか知れない、つまり自己が汗を搔いて掘ッた穴の中へ自己まづ落込ンで、おまけに後から來た味方を引ずり込むのと同じこッた、加之も狡猾なる敵は心で面白く笑ひながら、わざと殊更ら顏を皺めて世間に向ひ、あゝいふ始末の惡い恒心のない節度を失ッた人間の寄合ですから其主義は認めますが其行爲に同情は出來ない、彼等の要求全部を容れるには今日に於ける彼等の品性上まだ早い、結局、彼等は彼等それ自身の根柢を破壞するのみで、寧ろ資本家の彼等に應ぜざるは相當の歲月間、彼等の地位を護り彼等の自滅を救ッてやる所以であると、いかにも尤もらしく、かういふ好きな熱を吐て、直接の利害なき社會の第三者に訴へるンだ、その上に治安警察法といふ利器があるンだから、どうしたッて戰さは負けるぢやアない

か、お爲ごかしに踏み付けられるとは此こッた、はゝゝゝこころで現在、はゝゝゝゝと笑ッてる我々を顧みれば、やはり今いふ下手な戰さを仕て來た拙い方で、一時は川口電工會社の半以上を動かしたに拘はらず、一月あまり睨み合ッた結果、やう〳〵八人こゝに打漏されの體、實は大きな聲で笑はれないンだ、しかし其處だよ、前夜、まンじりとも寢ずに考へたのは、其處にある、そこに始めて氣が付いて、なるほど、あれぢァ迚も無效だと思ッた事がある、一たび遣り損ッた經驗上、御丁寧に馬鹿な眞似を繰返さず、もはや再び失敗を重ねざる出直しのため、あらためて前途將來に對する僕の方針を語るンだ、いや、相談するンだからね、その覺悟で聞いて貰ひたい、おい君まだ殘ッてる筈だ、もう一杯、番茶の世話に預らう」

また二杯目の番茶を一息に飲乾せし岡田貞吉、さらに言葉の力を入れて、

「こりやァ僕、一人の考へだがね、かうして八人、こゝに居ても仕方がないよ、交々五指の彈かンよりは一拳に如かずといふ諺はあるが、寧ろ今日の我々は團子のやうに固まらないで、ちり〴〵に別れて仕舞ッた方が宜いかと思ッてる、なゝ何故といへば、そこだ、そこを前夜、うンと考へた」

八人の異體同心、あくまで初志を貫かむと誓ひしのみか、加之も其旗頭たる阿田貞吉、くるりと一夜に方針を變へて、ちり〴〵に別れむとの說、暫し呆れし七人の面を見渡しながら、

「こゝは君等、をかしく變な心持で妙な感じを持たず、虛心平氣に落着いて、よく聞いてくれよ、つまり今日の社會狀態に對して今日我々の理想とするところは、たゞ大勢の機運が向ッて來たといふだけで、迚も二年や三年の短日月に思ッた通りの實際は行はれ

ないぜ、たとひ人道上の不自然にしろ、苟くも何千年といふ因襲の久しい根柢の深い、加之も貧富の懸隔より餘儀なく出來た主從關係の縛り繩を解いて、あらたに彼と我との對等にならうとするンだから、なか〳〵一朝一夕の業でなく、前途の遙なる大仕事だ、いかに目的は手段を辯解するとしても、その手段を辯解してくれる道行は、あまりに長く、あまりに遠過ぎて結局、殘念ながら途中で手段倒れにならざるを得ない、どンな智慧を絞ッても、どう工夫しても奈何せン、目的を達するまで手段が續かないよ、これを最も手近の簡單に語れば、幸ひ例の省三氏ありしため八人とも懷中に多少の金は持ッてゐるが、もし萬一あのまゝ首になッたら、素寒貧の我々、どうする、いくら理想は高尚で目的は立派でも現在その日に追はれて、勞働問題よりも生命の種のパン問題に奔走しなければならない、これまで諸方に起ッた同盟罷工が始めの勢ひに似ず、いづれも案外に早く凹垂れるのは、勞働問題の手段として同盟罷工そのものゝ惡いのではなく、また强ち結果の薄弱のためでもない、第一まづ食ふと食はざるの境目に落ちるからだ、乞ふパンを與へよ然らざれば死を與へよといふ勢ひで押掛けりやァ一も二もないが、そこには人間また親あり兄弟あり妻子ありて自然の情愛に引かされ、自己たゞ一人の捨身にもなれないから、口でこそ叫ぶが實際、なか〳〵出來ない藝だ、つまり戰はざる前に勝敗の數は殆ど知るべしだ、その知れきッた戰ひに向うて前途遼遠の目的を達せンとすれば、どうしても自分の生命を繫ぐのが第一の急務だ、ところで君等に改めて相談するのは、外でもない、かうして八人このまゝ此處で氣焰を吐いて居ても到底、一時の溜飲を下げるくらゐが關の山で、づう〳〵しい横着な甲羅を張ッた今日の資本家に何等の效力もないうか〳〵すれば手を拍ッて好い笑ひ草になるばかりだ、そンな馬鹿な目に逢ッて癪に

觸たり憤慨するよりは、いッそ今の内、おの〳〵互に相別れて、暫く雌伏した方が宜からうぢやないか、いはゆる臥薪嘗膽の考へで、めい〳〵どッか、また勤め口を捜し出して、當分まア面を被ッてるンだ、しかし徒らに棚の牡丹餅流で、無爲無能に茫然と時節を待ッてるンぢやたない、こゝに寧ろ大なる意義がある、まづ今日の我國で單に筋肉的の勞働者と稱すべき職工の數は男女を合して、凡そ百二十餘萬人だ、ね、その一人が一日に五厘づゝを除けて、よけいなものとすれば月に三五の十五錢、全國を通じて一個月、ざッと十八萬圓、一年で二百十六萬圓、たッた五厘だぜ、いくら職工でも五厘は何でもない、ぱッ〳〵と煙にする敷島一本の値に當らないンだ、その五厘を君、二個年間、積ンだとすりや、銀行利子を加へて五百萬圓に近い金だ、僅か四年で一千萬圓、もし今日の勞働者が叫ぶところに一千萬圓の運動費ありとすれば、我々の素寒貧を見縊ッて安心して居た資本家は少々、變挺な心持になッて聊か薄氣味が惡からう、たとひ一千萬圓に達せずとも、全國の職工が勞働問題のため日に五厘づゝ積み出したとなれは、それだけで十分、資本家に對する實際の權威が生じて來て、今までのやうに我々を馬鹿にした熱は吐かさない、ところで五厘會といふものを完全に成立させる方法、順序、主意綱領その他の總てに關するものは、前夜、ぐう〳〵と君等の寐てる時に、そッと起きて書いて置いた、兎も角も見てくれ」

さらに五厘會の内容に關せる草案を七人の前に示して、

「兎も角それを見てくれ、ゆうべ、一夜づくりの鉛筆書で、まだ委しく何も出來て居ないが大體の骨子は、それだ、どうしても僕は今日の狀態上、華々しい一時的のお祭り騒乃至また直接に利害關係のない他人の學說を力にしたり贊成を賴ンだりするよりも、

この取るに足らない小さい自發的の五厘會を以て最も有效に最も實際に偉大なる活動の近道と信じたから、あらためて君等七人に相談するンだ、もし僕の考へに一致したとすれば、八人こゝに空しく徒らに慷慨悲憤するよりは、先刻もいふ通り、おの〳〵相別れて暫らくの間、やはり元の職工に復した上、いたるところの工場で五厘會の主唱者となり五厘會の傳道者となッて、あくまで五厘會のために全力を注いで貰ひたい、しかし說くには決して高尚なる議論も絲瓜も入らない、寧ろ難かしい理窟めいちやァ無效だ、つまり只この五厘といふ事を手輕く簡單に加之も早分りの徹底的に話せば宜い、まづ例を擧げて見れば、物價騰貴の今日この五厘銅貨一個を市中へ持ッて出て何が買へる、どンなものが求め得らるゝか、凡そ口へ這入るものは按摩の笛まで高くなッてる時だから、いくら安くッても最下等の餅菓子一個は一錢だ、貧民窟の小兒も五厘で承知せず燒芋も五厘ぢやァ賣るまい、我々の生命を繋ぐ米が一升六萬粒として飯に焚きあげた五厘は君等、燃料と手數を差引いて全體、どれほどだと思ッてる、慌てゝ食ふ奴は一日に五厘や六七厘づつの飯粒、きッと膝の上か疊の上に零してるぞ、職工が毎日の辨當箱に殘して辨當屋に洗ひ流さるゝだけでも一人前、三度に五厘は捨てゝるンだ、その五厘を積んで月に十八萬圓、全國の我々で四箇年に凡そ一千萬圓の運動費を得らるゝとすれば、こンな立派な確實な戰鬪備準が出來るぢやないか、諸君、どうだと、かういふ工合に說て廻るンだ、こりやァ一例だよ、一例だが萬事この調子で、うまく說けば必ず成功するに極ッてる、つまり餘裕のない人間だからね、その錢で直に物が買へては到底、實行は覺束ないが、あッても無くても同じやうな五厘づゝで、他日に於る自分等の大なる利益を產み出すとなれば、この五厘會の成立、どうしても出來る筈だ、もし萬一これが出來ない

やうぢやア我國の勞働問題も當分まア無效だ、ちよいと世界的の尻馬に乘ッて脚本は宜いかも知れないが、肝心の舞臺に活躍すべき俳優は田舍まはりの下手糞たるを免れない、はゝゝゝ時に僕は今日それに付て猶、外に考へた事のため出てくるからね、後で君等ア七人よく相談して置いてくれ、夕方までには歸る、歸ッた時、あらためて返答を聞かう」

兎も角も熟考の上、返答してくれと五厘會の草案を宿題の如く七人の前に殘し置き、ぷらりと其まゝ立出でし岡田貞吉、

實は外に用なく、どこへ行くといふ的もなく、つまり彼等に遠慮なき思ふ存分の議論を吐かせて、結局その諾否を聞けば足る、たとひ七人の同志を失ふとも、頑として動かざる覺悟、あくまで五厘銅貨一個の信念を以て天下に叫ばむとする決心、



もはや無川の智慧も工夫も入らず、心機一轉あらゆる總ての煩はしき亂雜を避け、今までよりは却て單純に要領を得たる心地、もし間違へば五厘銅貨と心中するのみにありと、人知れぬ心の洒落に思はず笑ひながら、足の向きしまゝ目黑發の電車に乘り込みしが、用なく的なき身の行先を車掌に問はれし時、無意識に出でし言葉は、築地の本願寺前、

當分の間は再び家に歸らぬ筈なれど、不意に叩かれて鳴りし音は緣なき麻布にも四谷とも響かず、やはり父と妹に引付けられて、築地の本願寺前と答へしが、また何となく未練らしき心地に制せられ、銀座に近き途中より降りて、ぶら〳〵と歩み出し折しも夕陽の傾き空を仰ぎながら、いつしか尾張町の角まで來りし時、ふと見れば、日比谷公園の方へ二人連れの後姿は、正しく川口省三と妹お雪、貞吉、わざと其まゝ京橋の方へ七八間も急ぎしが、俄に足を停めて小首を捻りし後、また立戻りて二人の後を見えがくれに、そろり

そろりと同じ日比谷の方へ、

もし一月以前の我目に入れば、騙き小鳥を捕へて弄ぶ奴、眼前の餌に釣られて弄ばるゝ女、物もいはず兩の拳は鐵丸の如く飛ンで一小悲劇を演ずべきこころなれど、うき世を浮世とせる今の兄は寧ろ我身の振返らるゝを恐れ、只その影を守りながら、あはれ一時の戀に止まらず、願はくは二人の身に行末の長き幸福あれかしと心の底に祈りて、をり〳〵見れば、頻りに何をか慰めつゝ歩む省三、さも親しけに倚り添うて打仰ぐ妹、これならば父の上にも心配なしと、おもはず微笑を浮べし貞吉、

二人は日比谷の公園に入りて、ベンチにも腰を卸さず、コーヒ一杯の店頭にも憩はず、次第に暮れ行く空を惜むが如く、初夏の茂れる葉影うす闇きところを、いかにも樂しげに歩みながら、また出でゝ元の道を私語きつゝ繁華の銀座を横ぎり、淋しき築地の本願寺に添ひ備前橋の此方まで、凡そ三時間ほどの間を歩き續けて更に草臥れたる風情なく、その別れ際また暫しの立話、

お雪の橋を渡りきるまで見送り、お雪の振返りて會釋せし時、始めて動き出せし省三、加之も此方へ歩み來る足の早さ、たしかに二人連れの時よりは五六倍の速力、貞吉は聊か慌てゝ追はるゝが如く、幸ひの夕暮を本願寺の角まで逃げ來りしが、また俄に思ふところありて立戻り、わざと何氣なく出逢ひながら、

「や、これは」

現在この兄の妹に戀路の歸り道、だしぬけの不意に襲はれしが如くおもはず眞正面を避けて、聊か横向に顏を反けながら、即座の言葉も出ざる空笑ひ、

「はゝゝゝ」

外の事には狼狽へぬ智慧も分別もあれど、こゝが斯人の價値と氣の毒に思ひし貞吉、すぐに我より打解けて、

「おかけで、この通り額の疵痕も段々、薄らいで來ましたから、御安心下さいますやう、身體は以前よりも寧ろ却ッて惡達者に、ピン〳〵致して居ります、よほど粗末に手丈夫ゝ見えましてね、はゝゝゝ」

「そりやァ何より結構、時に、これから家へ、歸られるのかね」

「いや、實は過日、それゝなく阿父へも當分の間、歸らない事にして置きましたが、ちよいゝ、言ひ忘れた事が御坐いますので、もし妹が近處へでも、用達に出ればゝ思ひましてね、幸ひ今日は暇がありますから、なァに只、ほンの、つまらないこッてすが、やはり氣に懸りまして」

その妹と今そこで別れしゝも得いはず、細きステッキの尖端に輕く大地を叩きながら、

「いくら磊落に見えても、それ〴〵人は、いろ〳〵世間の知らない小さい事に猶更ら、苦勞の多いもンらしい」

獨言のやうに同情を寄せて、加之も貞吉よりの言葉を待つが如く、たゞ受け身となれば、こゝは情の刄を向けて痛くない筈ゝ、省三の胸を抉る一言、

「近所を彷徨て居ても妹が出るか出ないか、それも分りませンし、こゝで、お目にかゝッたを幸ひと申しては甚だ失禮ですが、いかゞでせう、貴君から妹の女へ、お傳へ下さいませンか」

あまりの單刀直入、いかにも皮肉なれど、案外また野暮でもない粹な男、おもはず夕暮の薄闇き下を向いて莞爾、